

表丹沢魅力づくり構想案

「本物の魅力」が見つかる表丹沢



令和8年(2026年) 月

秦野市
Hadano City

目次

■第1章 はじめに	1
1 表丹沢魅力づくり構想とは	1
2 対象エリア	2
3 位置付けと構想期間	3
■第2章 表丹沢を取り巻く現況把握	4
1 表丹沢の資源に関する現況	4
2 表丹沢を取り巻く社会情勢	13
■第3章 表丹沢魅力づくり構想の中間評価	20
1 中間評価の概要	20
2 各方針の成果と課題	22
■第4章 表丹沢が目指す姿と魅力づくり方針	26
1 方針の方向性	26
2 方針の構成	27
3 5つの基本方針	28
4 エリア別方向性	49
■第5章 構想の推進に向けて	61
1 推進体制	61
2 推進プロセス	63

*注釈

- ①年代表記については、表紙及び奥付を除き西暦併記を省略しています。また、図表においては、元号と西暦が混在しています。
- ②グラフ等の構成比の数値については、小数点以下第2位を四捨五入しているため、個々の集計値の合計が100%とならない場合があります。

第Ⅰ章 はじめに

I 表丹沢魅力づくり構想とは

「表丹沢魅力づくり構想」は、表丹沢エリアが持つ資源（農林業、観光、歴史、文化、スポーツなど）の潤沢さと都心からのアクセスの良さに加えて、新東名高速道路の開通による更なる魅力の向上、新たなサービスエリア（以下「SA」という。）、インターチェンジ（以下「IC」という。）の設置といった機運を捉え、当該エリアの産業振興及び観光振興等の地域活性化への期待といった背景を受けて令和2年9月に策定しました。

本構想は、表丹沢の魅力を生かし、表丹沢一帯にある様々な分野の資源を磨き、つなげ、新たに触れる機会を増やすことで、市民には表丹沢の魅力を再認識していただき、誇りや愛着、共感を育むシビックプライドの醸成につなげるものです。

また、表丹沢の本物の魅力を効果的な方法で発信することで、市外から多くの方に2度、3度と訪れていただき、第2のふるさととしての関係性を築くとともに、交流人口・関係人口の創出を通じた地域の活性化を目指すものです。

本構想では、以下の「魅力づくりビジョン」を掲げ、5つの基本方針及び方針に基づく取組により、ビジョンの実現を進めています。



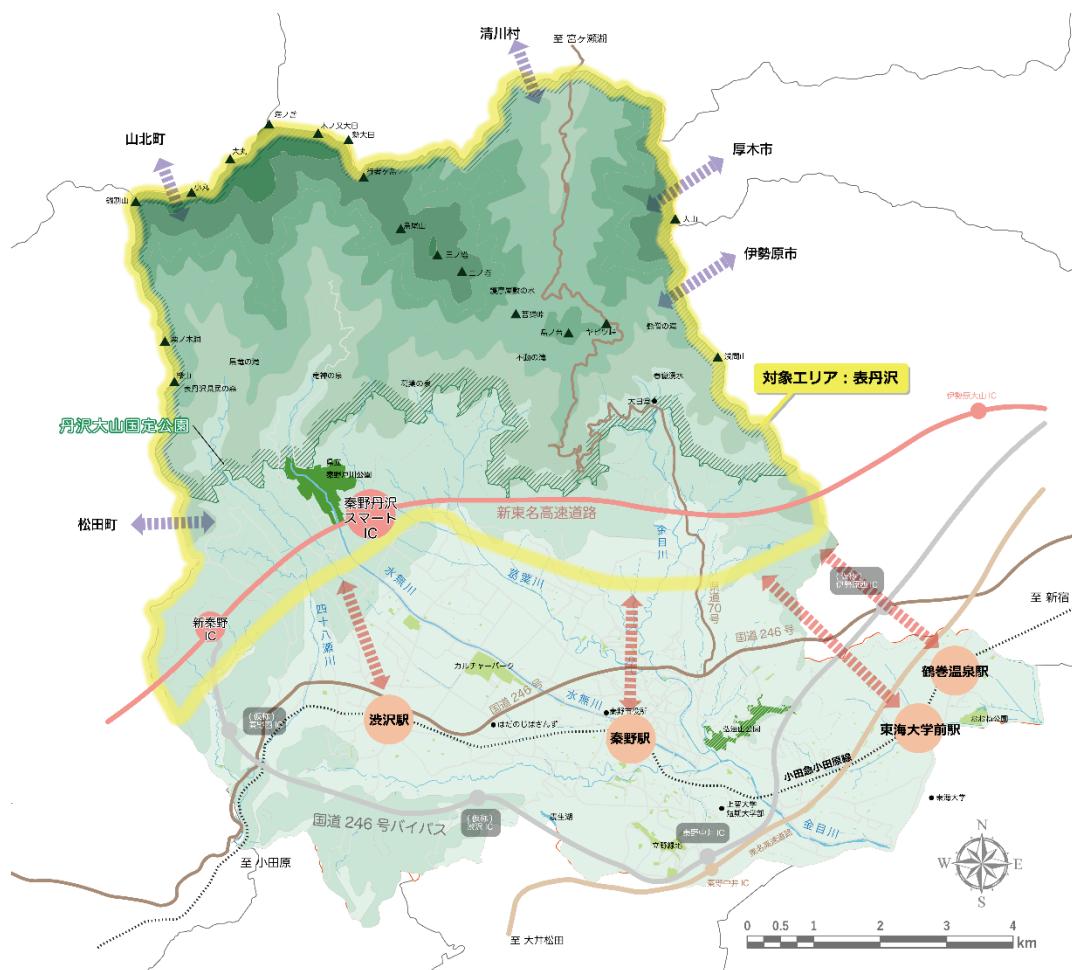
2 対象エリア

本構想では、本市中央を横断する新東名高速道路の周辺に広がる里地里山から北側に位置する丹沢山地一帯を中心とした本市域を「表丹沢」とします。

表丹沢の大部分は、自然公園法に基づき「丹沢大山国定公園」に指定されており、丹沢山地を代表する「塔ノ岳」、「鍋割山」、「大山」、「三ノ塔」といった峰で構成されています。

また、本構想は、表丹沢を対象エリアとしますが、本市の新たな玄関口となる新東名高速道路の秦野丹沢 S A 及びスマート I C 周辺、四季を通じて多くの登山者が訪れる表丹沢への玄関口である小田急線 4 駅を中心とした市街地及び丹沢の資源を共有する隣接市町村とも連携を図りながら推進していきます。

■対象エリア

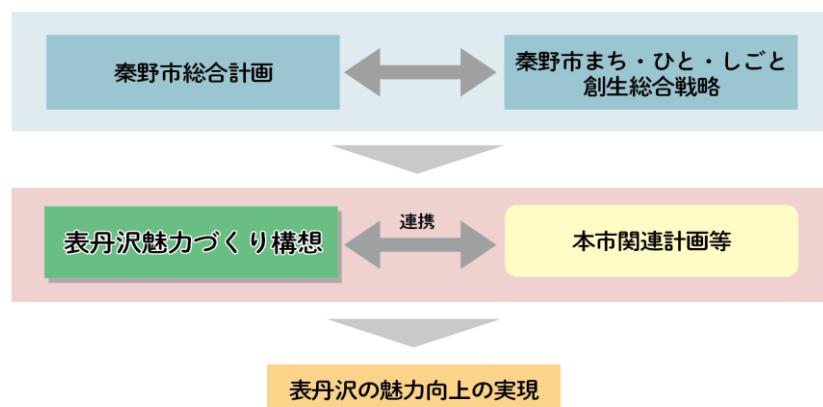


3 位置付けと構想期間

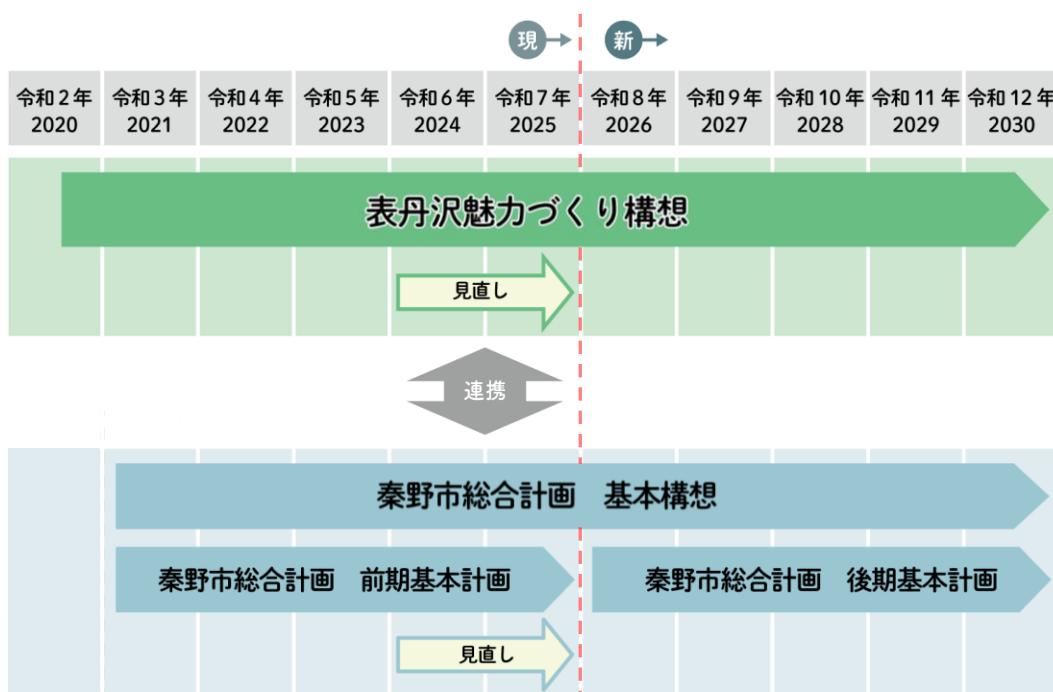
本構想は、「秦野市総合計画」、「秦野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を上位計画とともに、他の関連計画等と連携して整合性を図り、SDGsの理念にも対応するものとしています。

また、本構想期間は、令和3年度から12年度までの「おおむね10年間」とし、その達成度を検証するとともに、社会潮流の変化を予測した上で、新たな課題等に的確に対応していくため、「秦野市総合計画後期基本計画」と同様に、おおむね5年ごとに経過を踏まえて見直すこととしており、中間年となる令和7年度に点検・評価を行いました。

■構想の位置付け



■構想期間



第2章 表丹沢を取り巻く現況把握

I 表丹沢の資源に関する現況

(1) 都心から1時間のアクセスの良さに加えた広範囲からの交通利便性の向上

本市は神奈川県中央の西部に位置し、市の中心部は新宿駅から約56キロメートル、横浜駅から約37キロメートルの距離があり、小田急小田原線「新宿駅」及び相鉄本線「横浜駅」からそれぞれ約1時間でアクセスが可能です。

また、市の南側には東名高速道路秦野中井ICがあり、市の北側には新東名高速道路が整備され、令和4年4月に新秦野IC及び秦野丹沢スマートICの供用が開始された中、令和10年度以降には新東名高速道路の全線開通及び秦野丹沢SAの開業が予定されています。

これにより東名高速道路や圏央道（さがみ縦貫道路）とのネットワークが形成され、首都圏や中部、関西方面などからの交通利便性が飛躍的に向上することから、一層の産業振興、観光振興等の地域活性化と共に、本構想で目指すビジョンの実現がさらに推進されることが期待されます。



冠雪の表丹沢を背にしたロマンスカー

(2) 表丹沢のゲートウェイとしての小田急線4駅周辺のにぎわい創造

本市の市街地は、市域の南側を東西に走る小田急線4駅（鶴巻温泉駅・東海大 学前駅・秦野駅・渋沢駅）を中心に広がり、4駅を合わせた1日平均乗降人員数は、令和6年度には11万人を超えてい ます。市民に加え、本市を訪れる多くの方に利用され、表丹沢のゲートウェイとしての機能を発揮しています。

令和2年度に策定した「秦野市総合計画はだの2030プラン前期基本計画」では、リーディングプロジェクトの一つに「小田急線4駅周辺のにぎわい創造プロジェクト」を掲げ、各駅周辺地域の特色及び魅力を生かしたにぎわい創造に、公民が連携し取り組んでいます。

また、秦野駅北口周辺では、地元商店街と連携し水無川沿いの市道6号線を歩行者天国にして滞在快適性を向上させるイベントを実施するなど、「表丹沢の魅力づくり」と一体的な取組を推進しています。



表丹沢を望む水無川沿い空間の活用

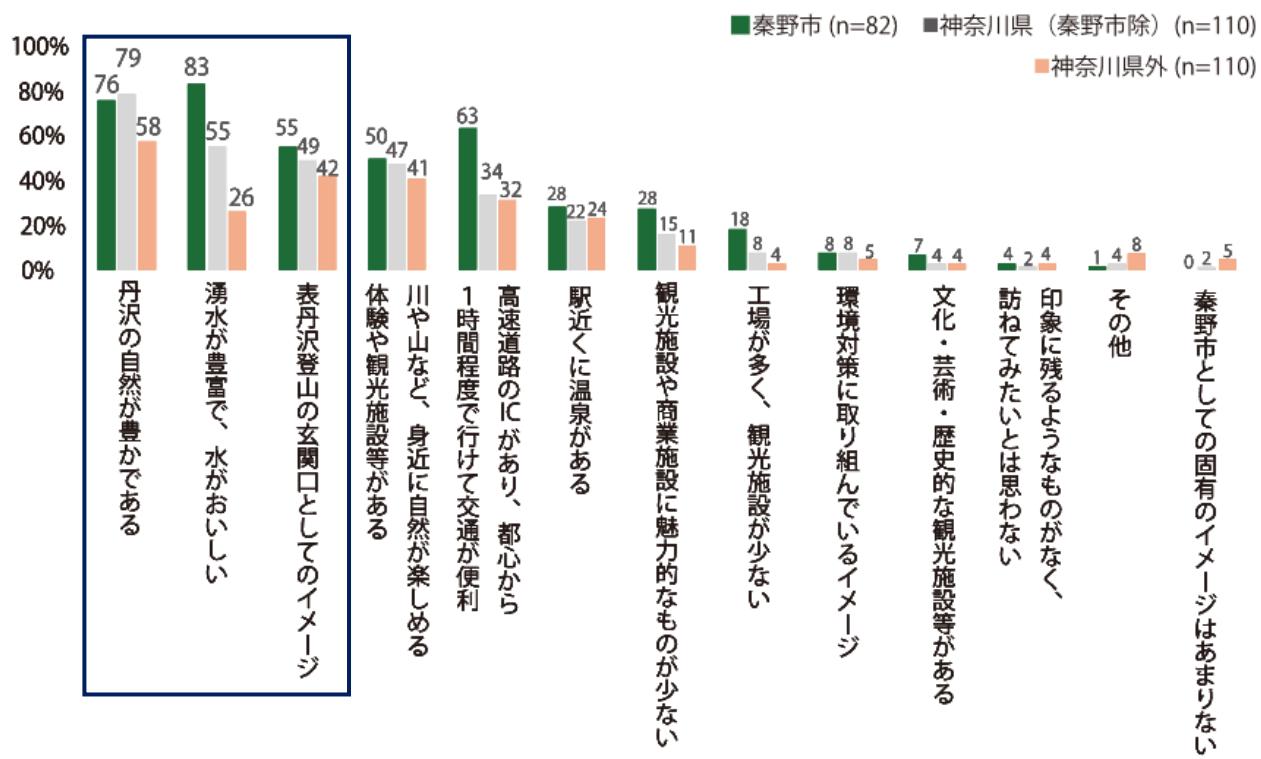
(3) 豊富な自然資源とアクティビティに関するイメージの定着

表丹沢エリアは、丹沢山地、その山々の稜線から発する河川、湧水、里山などがあり、緑と水に囲まれた自然豊かな環境です。これらの自然は、市民にとって暮らしやすい環境を実現する上で重要な要素の一つとなっています。

また、市外居住者も、本市に対して自然に恵まれた環境であるというイメージが大きくなっています。この傾向は、本構想の策定時においても明らかではありましたか、構想の見直しに当たり、市内外の方にアンケート調査を実施したところ、「丹沢の自然が豊かである」が市内外全ての居住者で5割以上の回答を、また、「表丹沢登山の玄関口としてのイメージ」、「川や山など、身近に自然が楽しめる体験や観光施設等がある」も4割以上の回答を得ることができました。

これは、本構想の推進によって、市内外へのイメージの定着が図られているものと理解できます。

■秦野市のイメージ（複数回答）

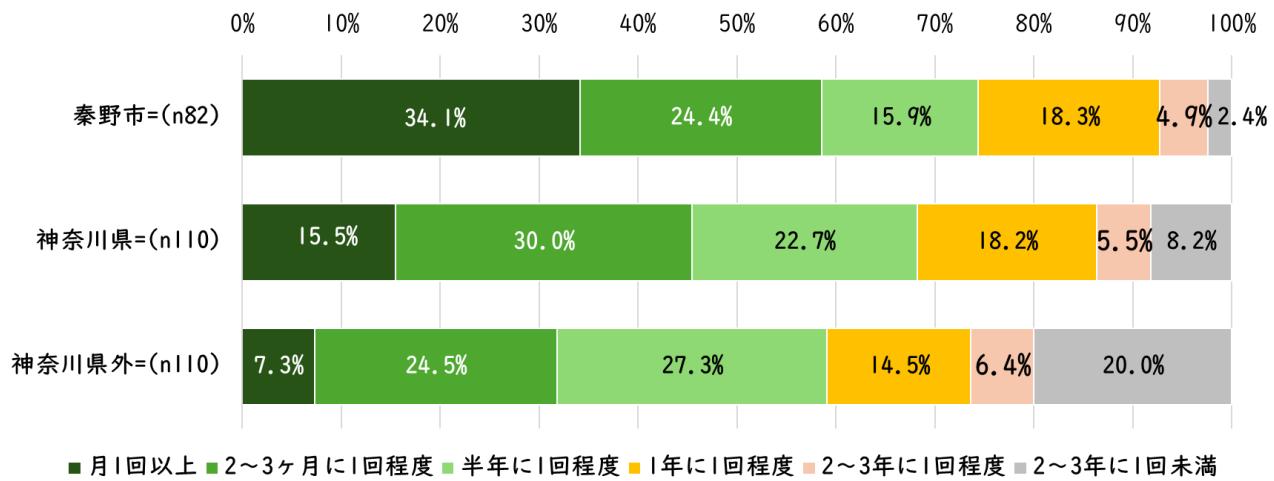


出典：秦野市「お出かけに関するWEBアンケート」（令和6年）

また、表丹沢への来訪者に対し「表丹沢エリアへの来訪頻度とエリア内での滞在に対する満足度」を聴取したところ、半年に1回以上訪れる人が全てのエリア（エリア区分の詳細は、P 8 アンケート項目を参照）で約6割を超えており、エリア内での活動に「とても満足している」、「満足している」を合わせると、約4割程度の人が満足をしていることが分かりました。

表丹沢エリアは、イメージの確立と、顧客の獲得ができリピーターを生み出す構造になっています。

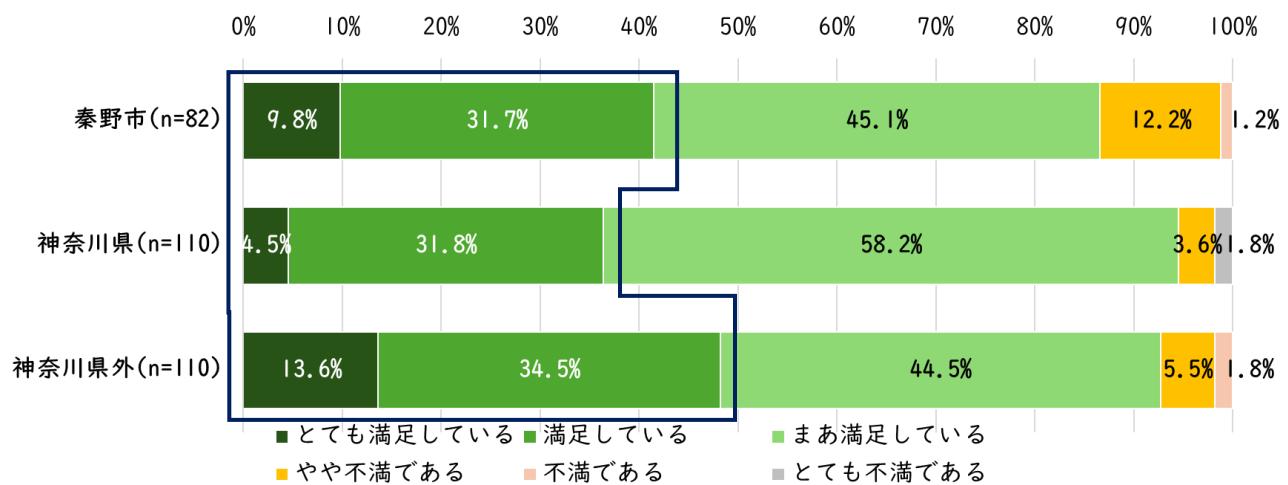
■表丹沢エリアへの来訪頻度



■ 月1回以上 ■ 2~3ヶ月に1回程度 ■ 半年に1回程度 ■ 1年に1回程度 ■ 2~3年に1回程度 ■ 2~3年に1回未満

出典：秦野市「お出かけに関するWEBアンケート」（令和6年）

■表丹沢エリアでの滞在に対する全体的な満足度



出典：秦野市「お出かけに関するWEBアンケート」（令和6年）

(4) 山岳、里山エリアに広がる資源とアクティビティ

表丹沢では、山岳エリア、里山エリア
それぞれで様々なアクティビティを体験
することができます。



塔ノ岳山頂

ア 山岳エリア

山岳エリアには、本格的な登山道が数多く整備されているため、登山等を目的に、年間80万人を超える人が訪れています。

近年は、登山だけではなくトレイルランニングなど、山岳アクティビティとしての活用も進んでおり、各レベルに応じたイベントも多く開催されています。

また、市街地からヤビツ峠へとつながる県道70号（秦野清川）は、ヒルクライムの聖地として多くのサイクリストが訪れています。平成30年からは、県道70号や桜沢林道等をコースとしたグランフォンド^{※1}やヒルクライム^{※2}の大会に加え、民間での小・中規模のイベントが継続して開催されるなど、表丹沢におけるサイクリング文化が形成されています。



表丹沢林道を活用したサイクリングイベント

イ 里山エリア

里山エリアには、森を楽しみながらこころと身体の健康維持・増進、病気の予防を行うことを目指す「森林セラピー^{※3}」が体験できるセラピーロードが5コース（P11を参照）あり、ゆったりと森林浴が楽しめます。

また、季節により、いちご、ブルーベリー、落花生、さつまいもなどの収穫体験が楽しめる観光農園や体験農園もあり、農家による収穫体験イベント「農園ハイク」も実施されています。

そのほか、キャンプ、川遊び、クライミング、そば打ち体験や木工体験など、豊かな里山資源を有する表丹沢エリアだからこそできることが広がっています。



森林セラピー



農園ハイク

このように、本構想の策定により、拠点となる施設を中心に一層の取組が図られています。

¹ グランフォンド：山岳コースをメインとした長距離を、景色を楽しみながら自転車で走る競技イベントのこと。

² ヒルクライム：峠や山道の決められたコースを、ロードバイクを中心としたスポーツバイクで登る競技もしくは乗り方のこと。

³ 森林セラピー：科学的な証拠に裏付けされた森林浴のこと。NPO法人森林セラピーソサエティの登録商標

表丹沢エリアに滞在した市内外の方を対象としたアンケート調査では、立ち寄ったことがあるエリア及び最も頻繁に立ち寄るエリアを尋ねたところ、表丹沢西エリア、ヤビツ峠周辺エリアを中心に、各エリアで活動が行われていることが明らかになっています。

■表丹沢における活動エリア（立ち寄ったことがあるエリア／最も頻繁に立ち寄るエリア）

	山岳エリア① …鍋割山、塔ノ岳、三ノ塔等を中心としたエリア	山岳エリア② …大山を中心としたエリア	表丹沢西エリア …県立秦野戸川公園、山岳スポーツセンター、はだの丹沢クラブミングパーク、滝沢園、新秦野 IC などの周辺エリア	表丹沢中央エリア …表丹沢野外活動センター、葛葉の泉、里山ふれあいセンターなどの周辺エリア	表丹沢東エリア …田原ふるさと公園、緑水庵、蓑手大日堂などの周辺エリア	ヤビツ峠周辺エリア …ヤビツ峠、菜の花台園地、護摩屋敷の水、青山荘、BOSCO オートキャンプベースなどの周辺エリア
立ち寄ったことがあるエリア	27.8%	48.7%	57.6%	25.8%	25.2%	43.7%
最も頻繁に立ち寄るエリア	9.9%	20.2%	39.1%	4.3%	5.3%	10.3%

出典：秦野市「お出かけに関するWEBアンケート」（令和6年）

(5) 表丹沢が育む豊富な地下水

地下水盆という地形的特徴から、秦野盆地の地下には、芦ノ湖の約4倍の約7億5千万トンもの地下水が蓄えられており、これらの地下水は、盆地内の各所で湧き出し、これが秦野盆地湧水群として名水百選に選ばれています。

これらの湧水は、市民の生活を支えるインフラとしてはもちろんのこと、湧水スポットを巡るハイキングツアーが組まれるなど観光資源としても活用され、多くの人が訪れています。

令和6年度には「秦野名水の活用戦略」を改定し、今後ますます表丹沢における水資源の価値が高まっていくものと考えられます。



護摩屋敷の水

(6) 多品種栽培が特徴の農業

本市の農業は、都心からのアクセスの良さを生かし、野菜、果樹、花き及び畜産物など多様な農産物を生産しています。落花生やカーネーションなど県内有数の産地となっている品目もあります。

市内には、18の直売所があり、特に「はだのじばさんず」は、県内でも有数の売場面積と売上げを誇る直売所であり、市民の生活の支えとなっています。

(7) 今につながる歴史・文化

ア 丹沢修験道

丹沢山地は、奈良、平安から江戸時代にかけて、山岳信仰に生きた修験者たちが修行を行った歴史を持ち、秦野にも多くの修験行所があったといわれています。

本市域の表丹沢で最も標高の高い塔ノ岳（尊仏山、標高1,491m）では山頂にあった大岩を「お塔」と呼び、雨乞いの神として祀ってきました。

そのため、丹沢山地には、今でも「行者」や「大日」など、修験者たちを偲ばせる山名が残っています。



塔ノ岳山頂にある狗留孫仏^{※4}の石祠

イ 御師の里として栄えた蓑毛地区

県道70号が集落の中央を縦断する蓑毛地区は、かつて大山詣りの人々を案内する御師（先導師）の家が立ち並び、南関東一帯に加え、伊豆、駿河方面からも参詣者が訪っていました。道中の道標等は昔の姿で残っており、蓑毛から大山へ向かうハイキングコースとなっています。

また、大山の登山口で山岳信仰の拠点とされた蓑毛大日堂や、不動堂、地蔵堂をはじめ、昭和初期の貴重な農家住宅で葉タバコ耕作に関わる遺構でもある緑水庵などの歴史的建造物が、国の登録有形文化財に登録されており、大日堂内には神奈川県及び市の指定重要文化財である仏像が数多く安置されるなど、歴史と文化遺産が色濃く残っています。



蓑毛大日堂



緑水庵

⁴ 狗留孫仏（くるそんぶつ）：塔ノ岳で尊崇される雨乞いの神。

ウ 他地区にある遺構、遺跡

東地区の東・西田原周辺には、鎌倉幕府3代将軍源実朝の首が持ち込まれ、埋葬されたと伝えられる「源実朝公御首塚（みしるしづか）」や、北地区には、菩提横手遺跡から出土した大型中空土偶など、遺構や遺物といった歴史的資源が数多く残っており、その存在も里山エリアへの訪問のきっかけとなっています。

(8) 資源を支える多様な団体の存在

ア 里山ボランティア

市内には、表丹沢をフィールドに活動する里山ボランティア団体が多く存在し、里山の下草刈り等の里山保全、田植えや掘り取り等の農業体験、里地里山を生かしたイベントなど、団体によって特色の異なる活動を通じた秦野の魅力を発信しています。

各団体が開催するイベントには、市民だけでなく、都心に暮らす高齢者や若いファミリー世帯も参加するなど、地域住民と来訪者の交流が生まれています。



里山での田植え

イ 観光ボランティア

秦野市観光協会では、観光ボランティアを募集し、現在40名以上が登録されています。研修を受けた観光ボランティアは、ハイキングの企画・実施やガイドを行っており、年間20件以上のハイキングが開催され、市内外から各回40人前後の方が参加しています。

ウ 森林セラピーガイド

本市の全域は、「森林セラピー基地」として、また、市内5つのコースは、「セラピーロード」として認定されています。

専門の資格を持った「森林セラピーガイド」が、イベントを開催し、森を通じて、こころと身体の健康を維持、増進していくための補助と助言を行っています。



森林セラピーガイド

■森林セラピーロード



エ OMOTAN^{※5} (オモタン) ガイド

「歴史・文化」や「自然」の基礎知識をはじめ、「ガイドとしての心得」、「コミュニケーション」、心と体の状態に関わる「ウェルビーイング」、「SDGs」など、本市が実施する様々な講座を受講し、その後の認定試験（実地試験）に合格した「地域限定のガイド」です。

本構想における取組として開始し、現在までに11名を「OMOTANガイド」として認定し、表丹沢の魅力を伝えるイベントやツアーなどが主体的に実施されています。



OMOTAN ガイド認定式

^{※5} OMOTAN (オモタン) : 表丹沢の略称であるとともに、「面白い」や「楽しい」の語感を組み合わせたキャッチフレーズ

■資源マップ



凡例

- | | | |
|--------|---|---|
| 拠点施設 | ◆ 市所有施設
◆ 県所有施設 | ◆◆◆ 丹波大山国定公園
◆◆◆ ゴルフ場
◆◆◆ 里山系団体活動フィールド |
| 林道 | — 市営林道
— 県営林道
— 組合林道
— 国有林林道 | — バス路線
— 森林セラピーロード |
| 都市計画公園 | ◆◆◆ 整備済み
◆◆◆ 事業中
◆◆◆ 未整備 | ■ 体験農園・観光農園
■ 山岳アクティビティ施設
● 水資源スポット
● 市の施設(公民館等)
● 直売所
● 歴史的・文化的遺産
● 温浴施設
● 山小屋 |
- ※標高グラデーションは、200m間隔で色分け

2 表丹沢を取り巻く社会情勢

(I) レジャー、観光に関する動向

ア コロナ禍後の観光、ツーリズムの復活

令和元年末に端を発した「新型コロナウイルス」の蔓延による人の移動の停滞は、旅行行動にも色濃く表れ、令和2年から令和3年にかけて、日本そして世界で旅行人口が減少しました。その後、令和4年頃から復調傾向となり、令和5年には概ね回復しました。

しかしながら、日本人の国内旅行者数は、コロナ禍前までの回復には至っていません。一方、インバウンド需要の増加や人件費、物価の上昇等を背景とした宿泊費の高騰により、国内の旅行消費額は25兆円を超え、過去最高を記録しています。

■旅行者数の推移（単位：万人）



出典：観光庁「旅行消費動向実態調査」確報

■国内旅行消費額の推移（単位：兆円）



出典：観光庁「旅行消費動向実態調査」確報

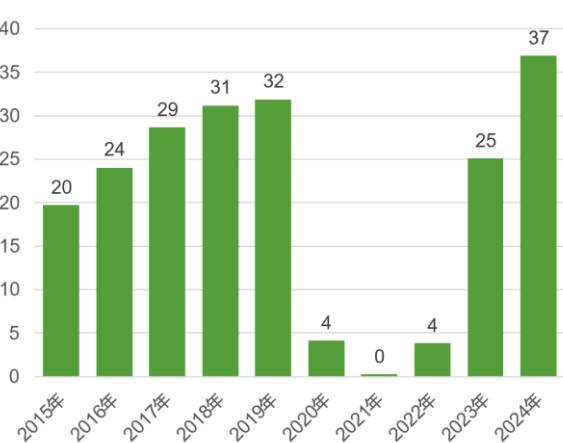
イ インバウンド旅行者の増加

訪日外国人の旅行者数は、本構想の策定時、3,188万人と当時の過去最高値を記録していましたが、**2024年は3,687万人と過去最高値を更新しています。**

また、インバウンドの宿泊数は関東が最も多く1年間で4,201万泊となっています。

なお、UNWTO（国連世界観光機関）によれば、旅行者の回復傾向は続き、2030年までに、世界的旅行者数は18億人に達すると予測しています。

■訪日外国人客数の推移（単位：百万人）



出典：観光庁「旅行消費動向実態調査」確報

また、国の「観光立国推進基本計画（令和5年策定）」においては、インバウンド需要の減少に伴う影響からの回復が重要戦略の一つとして位置付けられ、全体客数の回復と特別な体験やイベント等の実施などによる消費額の拡大、地方誘客を目指すとしています。

世界の潮流、政府としての施策推進から見ても、今後、インバウンドは更に増加していくものと考えられます。

さらに、神奈川県が行う観光客実態調査によれば、神奈川県を訪れる外国人観光客は、主に「食」、「自然・景勝地観光」に期待をして来訪をしていることがわかっています。表丹沢は、都心からのアクセスの良さに加えて、自然が豊かで歴史的な資源を多く有しております、アクティビティが多様にあることから、今後も国内旅行者やインバウンドに選ばれる可能性を十分に有しています。

観光客の動向をつかみ、表丹沢の資源を軸に、本市への人流を生み出していくことが重要です。

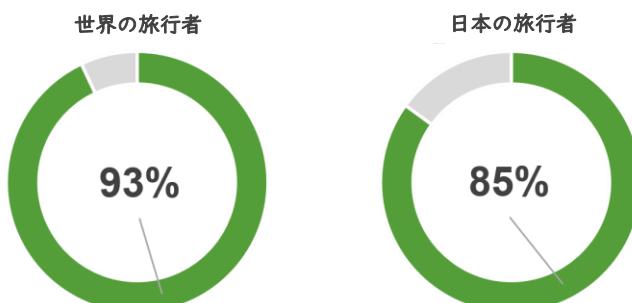
ウ 観光需要におけるウェルビーイングとサステナビリティへの意識の高まり

国内外の急速な観光需要の回復に伴い、問題となっているのが「オーバーツーリズム」です。近年、観光客が集中する一部の地域や時間帯において、過度の混雑やマナー違反による住民生活への影響が生じており、国は観光客の受入れと住民生活における満足度の維持を両立できる「持続可能な観光地づくり」の取組を進めています。

このような中、世界の旅行トレンドとしては、あらゆる場面での心身の健康や満足度、幸福感を指す「ウェルビーイング」の要素を踏まえたウェルネスツーリズム^{※6}や、環境配慮を前提としたサステナブルツーリズムに対する意識が高く、旅行予約サイト大手の企業が令和6年に行った調査によれば、「旅行に関してサステナブルな選択をしたい」と答えた人が日本では85%、世界では93%に達しました。

なお、日本での同調査は平成28年にも行われており、その際に同様の回答した割合は25%であったことからも、それ他の要素への意識が大幅に向上していることが分かります。

■旅行に対する意識「旅行に関してよりサステナブルな選択をしたい」と回答



出典：ブッキングドットコム 2025年版「サステナブル＆トラベル」に関する調査

⁶ ウェルネスツーリズム：ウェルネスとは世界保健機関（WHO）が国際的に提示した、「健康」の定義をより踏み込んで、広範囲な視点から見た健康観を意味する、より良く生きようとする生活態度のこと。輝くように生き生きしている状態のことを指す。ウェルネスツーリズムは、ウェルネスな状態をつくりだす手段を内包した旅行のこと。

特に、コロナ禍で強まった健康や自分らしい在り方、幸福などへの価値観に連動したウェルネスツーリズムの市場規模は拡大しており、これを推進するグローバルウェルネスサミット（2020年）において、日本のウェルネストレンド（長寿、美容、森林浴）が紹介されています。

自然の豊かさ、地域の資源を生かした魅力づくりを進める本市としては、引き続き、捉えるべき潮流となっています。

エ 温暖化の進行による気象災害等の発生

日本では、過去100年間で平均気温が1.40°C上昇しており、様々な気象条件が重なった結果ではありますが、令和7年の夏は、令和4年及び5年の平均を上回る高温となりました。また、将来予測によれば、21世紀末は20世紀末と比較しても平均気温は上昇し、多くの地域で猛暑日や熱帯夜の増加、冬日の減少、さらには、局地的・短時間の強い雨に加え、台風の発生割合も増えることが想定されています。

こうした気象災害を避けるため、アウトドアアクティビティの頻度や内容にも変化が起こることが予測されます。熱中症の予防、緊急時の情報発信、避難経路の明確化、屋内アクティビティの活用等を検討するほか、環境負荷の少ない交通手段の導入や観光施設における省エネルギー化の推進など、脱炭素社会の構築とともに、持続可能な観光の在り方の実現に取り組む必要があります。

(2) 生活・ライフスタイルに関する傾向

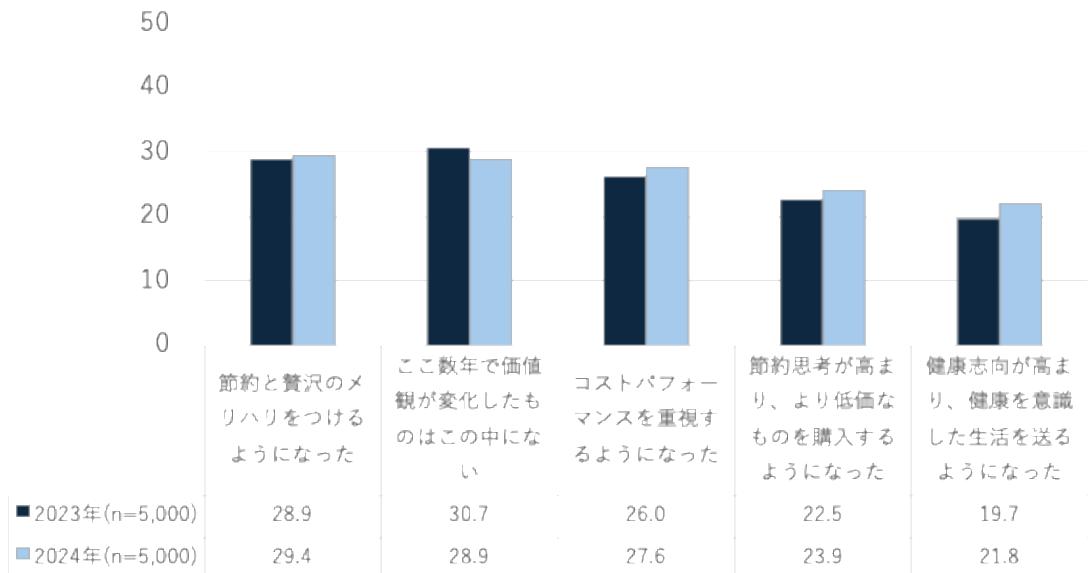
ア 節約志向とメリハリ消費

コロナ禍では、消費行動の停滞なども一因となり、消費者物価指数は下落傾向にありましたが、令和4年度以降は復調傾向にあります。

世界的な資源価格の上昇や円安、全体的なインフレ傾向から、食品・燃料などの生活必需品価格が上がる一方で、物価上昇に賃金の上昇が追いつかず、実質賃金は減少し、個人消費に影響が出ています。

民間の調査機関によれば、節約志向が高まったという回答とともに、節約と贅沢のメリハリをつけるようになったという回答も増えています。これらは、日々の消費を節約し、たまに贅沢をするという消費者行動であると理解できます。

■近年の価値観の変化（上位5項目／単位：%）

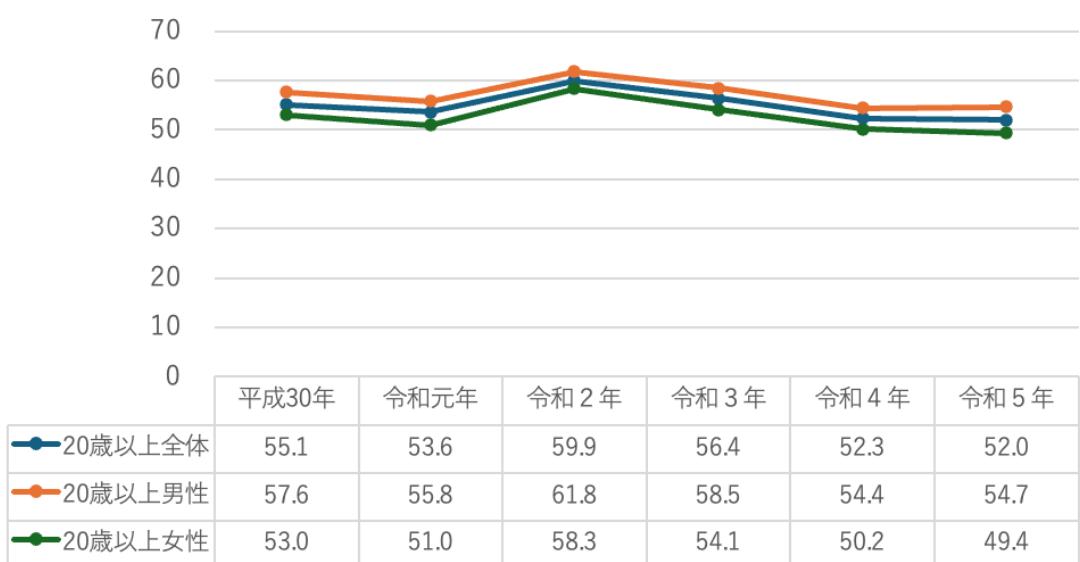


（出典）デロイトトーマツ「2024年度「国内消費者意識・購買行動調査」」

イ アウトドアアクティビティへの関心の継続

コロナ禍では、混雑を避けたアウトドアアクティビティを楽しむ人が増えました。スポーツ庁の調査によれば、週1回以上スポーツをする20歳以上の人の割合は、平成30年から令和2年にかけて、4.8ポイント増加しました。なお、令和4年には、実施率はコロナ禍前程度の水準まで戻っています。一方で、民間の調査機関によれば、アウトドア用品・施設・レンタル市場はコロナ禍明けの令和5年から6年にかけて回復の傾向が見られています。人生100年の健康志向時代において、アウトドアアクティビティへの関心は一定程度続くものと考えられます。

■20歳以上のスポーツ実施率（週1日以上実施率）の推移（単位：%）



20歳以上男性 n=19,499、20歳以上女性 n=19,597

（出典）デロイトトーマツ「2024年度「国内消費者意識・購買行動調査」」

ウ デジタルの普及と情報選択

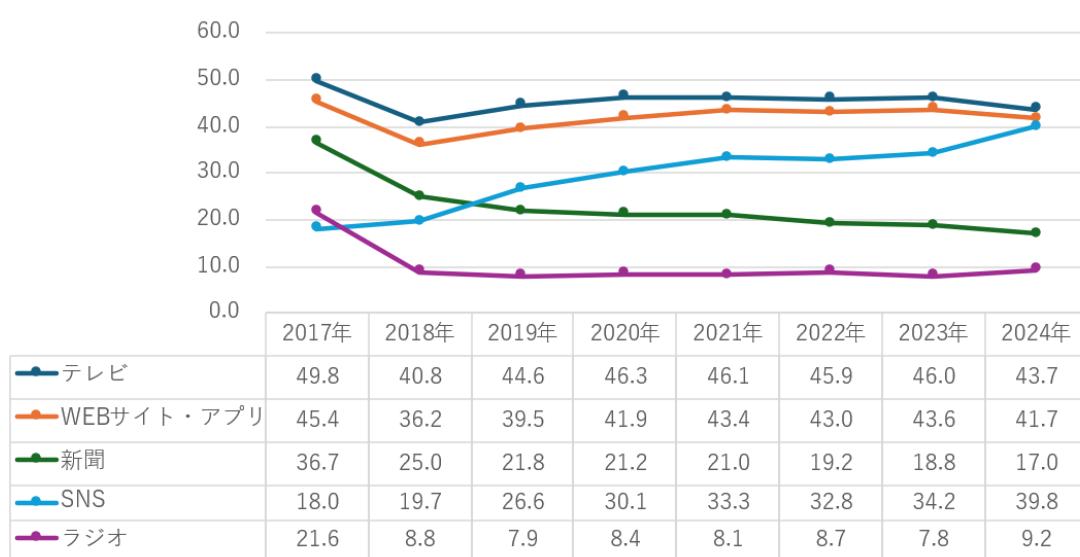
コロナ禍を通じて、消費者の行動様式では、「非接触、オンライン化」、「健康・安全志向」が一層広がりました。この中で、実店舗からEC（ネット通販）への移行が進み、物販分野の市場規模も大幅に伸長しました。非接触化が進む中で、キャッシュレス決済が大きく伸長しています。

総務省の調査によれば、令和4年におけるネットの利用時間は、平日・休日ともにテレビのリアルタイム視聴時間を抜き、令和5年には、テレビのリアルタイム視聴と録画視聴の合計時間をも上回りました。また、「メディアとしての重要度」も上回っています。

民間の調査機関によれば、生活情報を得ているメディアとして「SNS」が伸長を続けており、全年代合計でテレビやWEBサイトと拮抗する結果となっています。

本構想の進行期間中にインターネット上の情報利用率、重要性が高まっていくことが分かります。

■生活情報を得ているメディア（単位：%）



各年 n=6,440s (全国 15~79 歳男女個人、5 歳階級別母集団準拠)

(出典) モバイル社会研究所「2024 年一般向けモバイル動向調査」

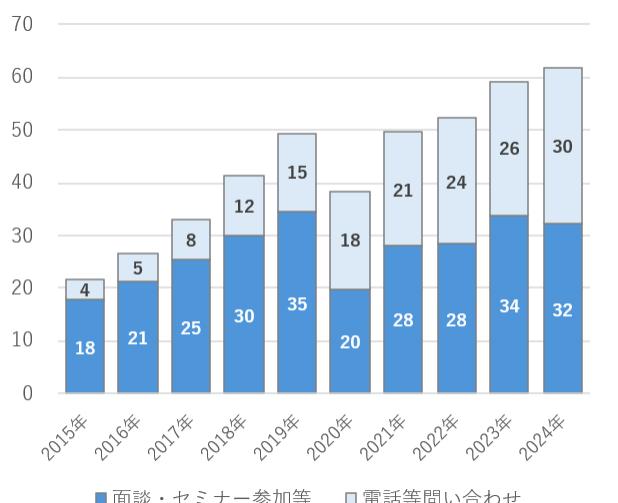
エ 移住、二地域居住等に関する関心の継続

東京・京阪神等の都市部への人口流入が続く中で、地方移住への関心は、継続して高い傾向にあります。

本市においても、令和3年以降、4年連続で社会増が続いている、30・40歳代の子育て層が増えています。

国はこうした動きに対して、移住の一つ手前のあり方として、「二地域居住等」の促進に係る制度設計を進めています。これは、住まいを都市部と地方部に持ち、双方を行き来しつつ両地域で生活することで、地方への人の流れを生み出しながら、地域の担い手の確保や消費等の需要創出、さらには、関係人口の拡大、雇用創出が期待できることから、都市圏に近い本市においては、多様な人材を呼び込む大きな契機となっています。

■移住相談件数（単位：千件）



(3) 環境・森林に関する動向

ア 生物多様性の確保に向けた取組の推進

令和5年3月に閣議決定された「生物多様性国家戦略2023-2030」では、2030年までのネイチャーポジティブ（自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させること「自然再興」）実現に向けた目標の一つとして、30by30^{※7}目標を位置付けています。

本市では、葛葉緑地（くずはの広場）及び生き物の里（柳川・渋沢・峠・名古木・千村・深沢・尾尻）が「自然共生サイト^{※8}」として指定されています。



ネイチャーポジティブ認定式



葛葉緑地（空中写真）

⁷ 30by30 : 2030 年までに、陸と海の 30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標。国立公園などの保護地域の拡張と管理の質の向上に加えて、保護地域以外で生物多様性保全に資する地域（OECM）の設定・管理を通して達成することとしている。

⁸ 自然共生サイト : 30by30 向けた取組の 1 つ。「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を保護地域内外問わず「自然共生サイト」として認定し、保護地域との重複を除いた区域を OECM として国際データベースに登録する。

イ 自然公園法の改正による国立・国定公園の魅力向上の推進

表丹沢エリアは、大部分が丹沢大山国定公園に指定されていることから、これまでも自然保護と合わせた利活用を進めてきました。本エリアを含め、国立公園・国定公園は、我が国の多様な地域性を映し、自然環境を保護する非常に重要な役割を担っていますが、令和3年をピークに利用者の減少が続いていました。

こうした状況の中、自然公園法の一部を改正する法律が令和4年4月に施行され、**自然体験活動促進計画制度及び利用拠点整備改善計画制度の新設**によって、市町村やガイド事業者等による協議会が計画を作成し、環境大臣・都道府県知事の認定を受けた場合、特例により手續が簡素化されることになりました。

これにより、**地域関係者が一体となって行う魅力的な自然体験アクティビティの開発・提供・ルール化**などが進められ、「保護と利用の好循環」の実現及び地域活性化にも貢献していくことが期待されます。また、近年ではインバウンド旅行者の利用も増えてきており、更なる活性化に向けた取組が進んでいます。

ウ 森林サービス産業の育成、関係人口の拡大

令和3年、国は今後20年間を期間とする『森林・林業基本計画』を策定し、森林・林業・木材産業による「グリーン成長」を提示しました。

これは、森林の適正管理により、林業・木材産業の持続性を高めながら成長・発展させるとともに、温室効果ガスの吸収効果を用いた「2050年カーボンニュートラル」に基づく豊かな社会経済を実現するものです。この中では、引き続き、「新たな山村価値の向上」や森林サービス産業とともに、関係人口の拡大についても明記されており、本構想の取組とも通じるものであるといえます。

第3章 表丹沢魅力づくり構想の中間評価

I 中間評価の概要

本構想は、令和2年度に策定し、これに基づき表丹沢エリアの魅力づくりを進めてきました。また、構想期間の中間年にあたる令和7年度を見直し期間と定め、取組に関する各課、関係事業者へのヒアリング、社会経済の動向、各種アンケート調査等によって構想の中間評価を行いました。

(I) 実施方法

中間評価は以下の方法で実施しました。

ア 市民・来訪者アンケート調査

目的	・表丹沢エリアで過ごした人の実態及びニーズを把握する。 ・表丹沢魅力づくり構想の推進による効果を把握する。
手法	オンライン定量調査
抽出方法	調査会社の回答モニターで、対象期間に表丹沢エリアに滞在したモニターを層化抽出
回収数	302サンプル（秦野市在住者82サンプル、秦野市以外の神奈川県在住者110サンプル、神奈川県外在住者110サンプル）
質問数	スクリーニング調査：4問 本調査：19問
実施期間	令和7年1月28日～同年2月3日

イ 施設来訪者調査

目的	表丹沢エリアの各拠点に対する利用者の意見を収集し、評価されている点、改善点を把握する。
手法	自記入型定量調査
対象施設	県立秦野戸川公園、はだの丹沢クライミングパーク、表丹沢野外活動センター、ヤビツ峠レストハウス、田原ふるさと公園、里山ふれあいセンター、緑水庵
抽出方法	各施設において対象者に配布 ※緑水庵については、常駐人員がいないことからオンライン回答フォームも準備
回収数	436サンプル（1施設50サンプル以上を目標）
質問数	11問
実施期間	令和7年1月11日～同年2月2日 (※一部施設は3月5日まで。緑水庵、県立秦野戸川公園は4月5日に追加回収)

ウ 事業者ヒアリング

目的	表丹沢魅力づくり構想に関連する主要事業者より、構想の推進による成果と課題を得るとともに、今後の展望について意見を得る。
ヒアリング対象	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 諸戸コーポレーション株式会社（秦野市表丹沢野外活動センター） ➤ 丹沢MON合同会社（ヤビツ峠レストハウス） ➤ ふるさと伝承館運営連絡協議会（田原ふるさと公園） ➤ 秦野市森林組合（里山ふれあいセンター） ➤ 蓑毛地区活性化対策委員会（緑水庵） ➤ 神奈川県公園協会・小田急電鉄共同事業体（県立秦野戸川公園・はだの丹沢クライミングパーク） ➤ 一般社団法人秦野市観光協会 ➤ 小田急電鉄株式会社 ➤ 神奈川中央交通株式会社 ➤ 秦野商工会議所 ➤ 秦野市農業協同組合 ➤ 丹沢秦野観光農業研究会 ➤ 表丹沢登山活性化協議会 ➤ 丹沢山小屋組合 ➤ はだの表丹沢森林セラピー推進協議会 ➤ はだの里山保全再生活動団体等連絡協議会 ➤ 神奈川県自然環境保全センター
実施期間	令和7年2月3日～同月19日

エ 関係課ヒアリング

目的	構想に位置付けられている各取組の進捗及び課題、展望について意見を得る。
ヒアリング対象	<ul style="list-style-type: none"> ➤ こども育成課 ➤ 農業振興課 ➤ 環境共生課 ➤ 森林ふれあい課 ➤ 観光振興課 ➤ 交通住宅課 ➤ はだの魅力づくり推進課
実施期間	令和7年2月3日～同月19日

(2) 実施体制

中間評価は、専門的知見を有する事務局（株）さとゆめが中心となり、調査設計及びヒアリング等を行いました。

各種調査結果やこれに基づく次期施策の方向性等については、有識者、関係事業者によって組織される「秦野市表丹沢魅力づくり構想アドバイザーミーティング」に諮り、推進方法についての意見を求めました。また、各取組の評価及び方向性等については、庁内会議においても確認を行い、実効性を担保しながら検討を行いました。

2 各方針の成果と課題

中間評価を踏まえた、各方針の成果と課題については以下のとおりです。

なお、成果に記載した事項の一部については、「3 5つの基本方針（P28以降）」の中で紹介しています。

方針Ⅰ：資源を支える仕組みの充実

目標	<ul style="list-style-type: none">・ 様々な資源分野（農林業、観光、歴史、文化、スポーツ等）にある各資源を磨き上げ、訴求力を高めます。・ 体験の提供と、それを支える拠点を形成します。・ 各分野をつなげる仕組みを整えて地域特有の魅力づくりを進めます。
成果	<ul style="list-style-type: none">・ OMOTANロゴの作成、情報発信の土台の立上げが完了しました。・ 各拠点が役割を果たし、連携を開始しました。・ 民間団体の積極的な活動が定着し、季節や時間帯に応じて多様なイベントが開催されました。・ 回遊と滞在を高める取組が一部進捗しました。
課題	<ul style="list-style-type: none">・ OMOTANブランドの確立と更なる訴求・ 民間団体による活動を広げるため、林道利用等におけるルールの整備や、PR・広報等の強化（継続的なヤマビル対策を含む。）・ 来訪者、住民の双方が安全かつ快適に表丹沢の資源を利活用できるよう、継続的なマナー啓発等・ 秦野駅からヤビツ峠への平日午後便が廃止となるなど、社会問題化しているバスの運転士不足
方向性	<ul style="list-style-type: none">・ OMOTANに紐づくコンテンツ^⑨の更なる充実と発信を進めます。・ 各拠点の活動及び拠点同士が連携した活動を活性化させるため、行政としての後方支援を強化します。・ ブランディングを複合的に進めることで、より活用をしやすい表丹沢エリアの実現を目指します。・ 小田急線4駅と表丹沢との周遊性を高める二次交通等の検討を進めます。

^⑨ コンテンツ：ここでは、歴史や地勢、人々の活動などの資源を活用した、楽しみのために提供できる体験やサービスのことをいう。

方針2：資源の適切な保全と新たな展開

目標	<ul style="list-style-type: none"> 表丹沢エリアにおける森林、里山の自然資源を、時代に合った形で活用します。 地域ブランディングにより高付加価値化された、地場産品等の魅力を発信します。
成果	<ul style="list-style-type: none"> はだのブランド認証品の取組が進捗し、名水スポットの名称決定などにより、秦野名水の活用が進捗しました。 遊休地及び二次林^{※10}の活用が一部進捗し、新たな利用につながりました。 民間団体による二次林の活用が進み、多くのイベントが開催されました。
課題	<ul style="list-style-type: none"> はだのブランド認証品の更なる付加価値化 市内の資源をより一層活用し、表丹沢ならではの魅力を体験できるイベントの企画、滞在時間や消費の拡大 一部遊休地の長期間にわたる未活用
方向性	<ul style="list-style-type: none"> 表丹沢、はだのブランドの更なる付加価値化に向け、域内外事業者の情報共有、交流の活性化、人材育成等を進めます。 遊休地について、引き続き、活用に向けた取組を進めます。 継続的な二次林整備に向けた体制の検討、構築を進めます。

方針3：地域が主体となった体験の提供

目標	<ul style="list-style-type: none"> 磨き上げた資源を体験できる状態にすることで、訪れた人が表丹沢の魅力を感じられるようにします。 地域ならではの体験提供と、地域の人との出会いを通じて市外の人が「再び訪れたい場所」となることを目指します。
成果	<ul style="list-style-type: none"> 民間団体により積極的にイベント等が開催され、表丹沢での活動を支える拠点の発信、連携が進みました。 これらの活動により、多くの誘客と表丹沢ツーリズムを体感する方の増加につながりました。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 拠点同士がより一層相互の協力がしやすくなるよう、表丹沢ツーリズム連絡会議等を通じた連携の下地づくりの強化 民間団体による活動の定着が見られることから、各主体における役割分担の再整理（市は後方支援へ移行）
方向性	<ul style="list-style-type: none"> 観光資源の有効活用に資する新たな民間活動に対して、柔軟に検討できるような体制づくりに取り組みます。（方針1から移行） 引き続き、こども向けに提供する体験の充実に取り組みます。

¹⁰ 二次林：人為的あるいは自然災害等により森林が破壊された跡に、土中に残った種子や植物体の生長等により成立した森林。

方針4：新しいライフスタイルの定着

目標	<ul style="list-style-type: none"> 表丹沢エリアが市民にとって豊かな暮らしにつながることを目指します。 コロナ禍を契機に、暮らし方や働き方が変化する中で、市民が地域の魅力を再発見し、誇りと愛着を持つことができるようになります。
成果	<ul style="list-style-type: none"> 表丹沢の資源をつなげ、様々なアクティビティを提供するOMOTANガイドの養成と認定、運用を行うことができました。 市内のことども向けアクティビティが活発に行われています。 移住体験住宅については順調に利用されています。
課題	<ul style="list-style-type: none"> OMOTANガイドと域内事業者との連携促進、一層の表丹沢の魅力発信と滞在・消費の拡大 コロナ禍当時の高いテレワーク実施率に対する、現状のふるさとテレワークの普及停滞 市民の地域ブランドやお土産、駐車場の整備等に対する不満感（アンケート結果）
方向性	<ul style="list-style-type: none"> OMOTANガイドのフォローアップや認知向上に取り組みます。 ふるさとテレワークに限らず、デジタル社会における新たな働き方に関する現状を踏まえた適切な環境整備を行います。 来訪者や移住希望者のみではなく、市民自身が表丹沢を知り、体験し、誇りに思えるような体験の機会を充実させます。

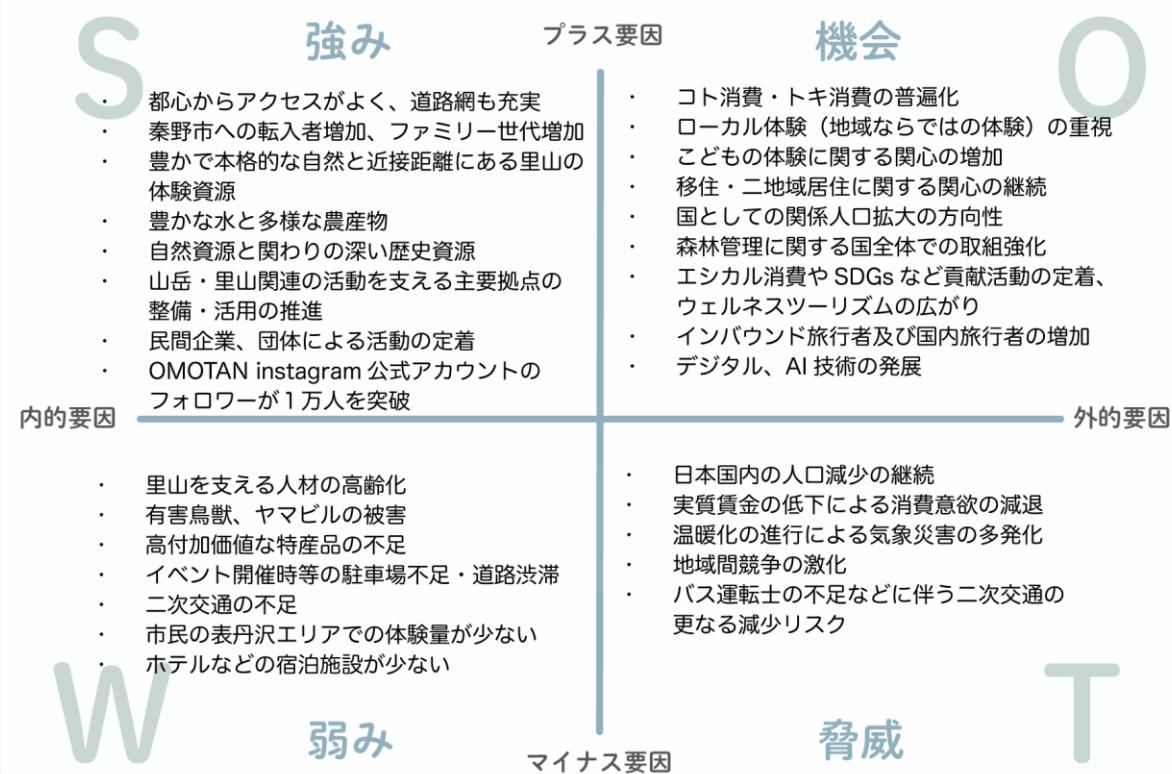
方針5：交流・発信による魅力の高め合い

目標	<ul style="list-style-type: none"> 表丹沢で個々に行われている発信を、効果的にターゲットへ届けます。 周辺市町村との連携による隔たりのない魅力づくりを進めます。
成果	<ul style="list-style-type: none"> 総合ホームページ「OMOTAN」、OMOTAN公式Instagramなど情報プラットフォームの立上げと運用方法を確立しました。 同Instagramアカウントにおける1万人以上のフォロワー獲得により、広告効果が高い状態を維持することができました。
課題	<ul style="list-style-type: none"> より効果的な発信を行うための戦略的な媒体の活用 周辺市町村との連携
方向性	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上げた情報プラットフォームを活用し戦略的に情報を発信します。 「かながわ観光連携エリア推進事業（県央やまなみエリア）」とともに、表丹沢エリアの魅力向上を推進します。

表丹沢魅力づくり構想（後半期）の方向性

表丹沢の資源や課題を踏まえ、強み（Strength）、弱み（Weakness）、機会（Opportunity）、脅威（Threat）から、表丹沢のポテンシャルを整理します。

■表丹沢のSWOT分析^{※11}



表丹沢魅力づくり構想（後半期）の戦略

S(強み) × O(機会)から

- 表丹沢エリアの資源の強さ・ブランド力により、OMOTANブランドに紐づくコンテンツの一層の強化と発信を行います。発信の際には構築したプラットフォームを生かしながら、戦略的なプロモーションを展開します。
- 活発な民間の動きを後押しするルール整備など、エリア内に一体感を創出することにより、来訪者の体験価値の強化を図ります。
- これらの取組は、OMOTANの更なる訴求と交流・関係人口の創出につながります。

S(強み) × O(機会) × W(弱み)から

- こどもを含む市民自身の表丹沢資源の体験機会の充実等を通じて、表丹沢への愛着、シビックプライドの醸成を図ります。
- 地方における体験意向や移住・定住への継続した関心の機運を捉え、域内の市民との交流体験等も含めた来訪者の「第2のふるさと」を醸成します。関係人口の創出等を通じて、地域における担い手不足の解消に努めます。

¹¹ SWOT分析：内部要因（強み・弱み）と外部要因（機会・脅威）をかけ合わせて分析することで、方向性や改善策を洗い出し新たな戦略を導き出す、現状分析のために使用される手法の一つ。

第4章 表丹沢が目指す姿と魅力づくりの方針

I 方針の方向性

表丹沢には、農林業、観光、歴史、文化、スポーツなど様々な分野の資源があります。魅力づくり構想に位置付ける方針や取組を通じて、表丹沢の魅力づくりを推進するための基盤、拠点、人が整い、充実し始めていることがわかりました。

そこで、「第3章 表丹沢魅力づくり構想の中間評価」の結果も踏まえ、魅力づくりビジョンである「「本物の魅力」が見つかる表丹沢」を実現するため、構想策定時に定めた「魅力づくりの5つの基本方針」の方向性については変更せず、現行のまま取組を推進していきます。

■魅力づくりビジョン（再掲）

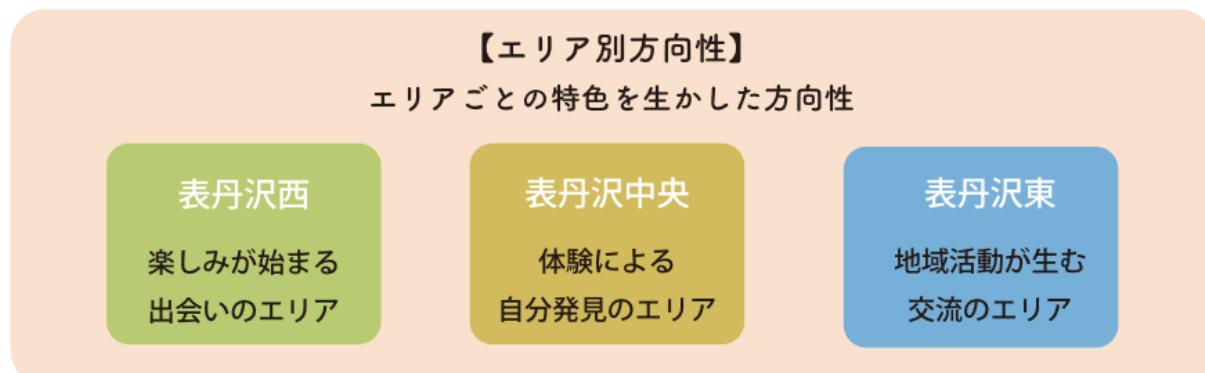
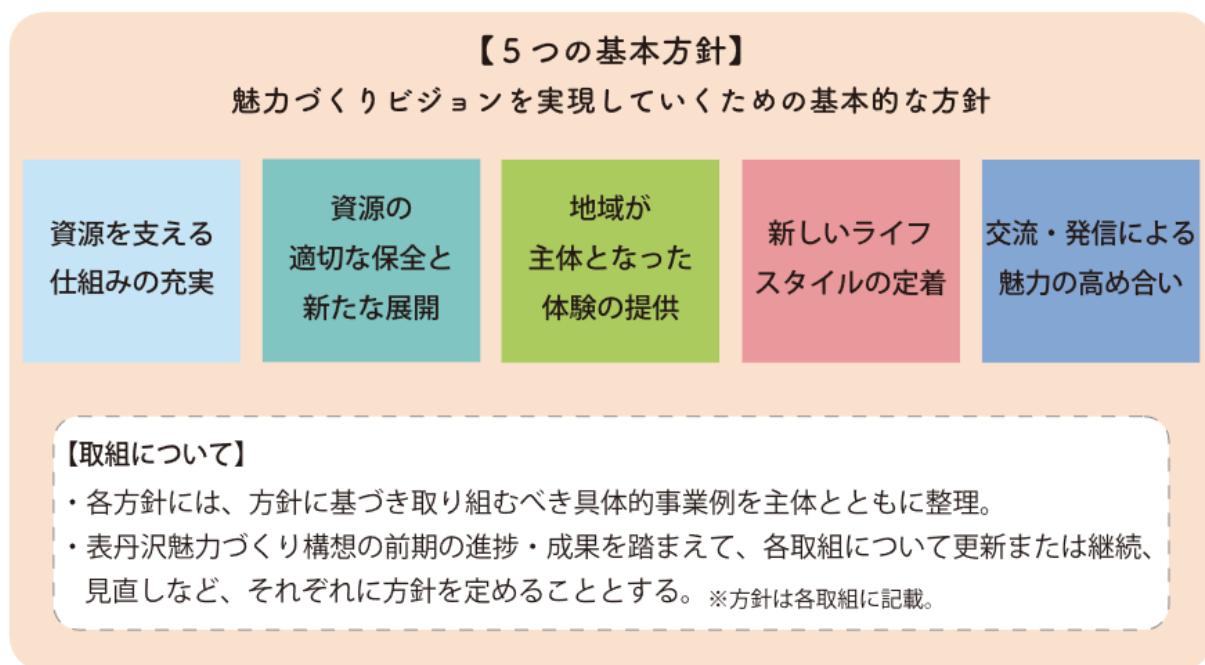


2 方針の構成

本構想は、「魅力づくりの5つの基本方針」と、エリアごとの特性を踏まえた具体的な方向性を示す「エリア別方向性」で構成します。

「魅力づくりの5つの基本方針」は、社会潮流や表丹沢の課題を踏まえ、魅力づくりビジョンを実現していくための骨子となる方針を示します。一方、「エリア別方向性」は、「魅力づくりの5つの基本方針」を横断的に取り入れ、エリアの特性に応じた取組を展開していくとともに、エリア間の連携を図っていくことで表丹沢全体の魅力向上につながる方向性を示します。

■魅力づくり方針の構成



3 5つの基本方針

「本物の魅力」が見つかる表丹沢

魅力づくりを実現するための基本方針を5つのテーマで整理し、具体的な取組の方針を示します。

方針1 資源を支える仕組みの充実

- 1 都心から近い山岳・里山アクティビティの聖地
「OMOTAN」としてのブランディング
- 2 活動を支える拠点形成
- 3 回遊と滞在を高める仕掛けの充実
- 4 安全・安心に楽しむための基盤整備

方針2 資源の適切な保全と新たな展開

- 1 資源の新たなプロモーション
- 2 遊休地等の有効利用
- 3 二次林の活用等による適切な自然保護の推進

方針3 地域が主体となった体験の提供

- 1 地域特性を生かしたコンテンツの強化
- 2 地域による魅力の発信と交流

方針4 新しいライフスタイルの定着

- 1 市民の暮らしに身近な表丹沢
- 2 表丹沢での新たな楽しみ・暮らしの提案

方針5 交流・発信による魅力の高め合い

- 1 情報プラットフォームの充実
- 2 周辺地域との連携による魅力の広がり

方針Ⅰ 資源を支える仕組みの充実

表丹沢には、農林業、観光、歴史、文化、スポーツなど様々な分野の資源があり、これらを生かした魅力発信による更なるエリア価値の向上が期待されています。様々な分野の資源を磨き上げていくとともに、体験の提供とそれを支える拠点形成を目指し、各活動をつなげる仕組み等を整えることで、地域特有の魅力づくりを進めていくことが重要です。

I 都心から近い山岳・里山アクティビティの聖地

「OMOTAN」としてのブランディング^{※12}

表丹沢は、都心からわずか1時間という立地でありながら、四季折々の表情を見せる豊かな自然を有しています。表丹沢の山々では、登山や沢登り、トレイルランニング、サイクリング等の本格的な体験が楽しめます。また、麓では、観光農業、キャンプ・バーベキュー、歴史・文化遺産巡りといった、ゆとりある体験が楽しめます。

このように、奥山から里地里山まで、標高により様々な体験が楽しめる表丹沢は、子どもから高齢者、初心者から熟練者まで、幅広い層を受け入れられるのが魅力です。表丹沢エリアではこれらの体験を「表丹沢ツーリズム」として位置付け、表丹沢ツーリズム連絡会議における関係者の連携強化、OMOTANロゴマークの作成、活用、体験造成の支援等を進めてきました。

構想の後半に当たる期間においては、「表丹沢ツーリズム」の更なる充実とOMOTANブランドの強化、更なるロゴマークの活用・拡散なども積極的に行うこととし、表丹沢を訪れ、表丹沢を知る全ての人が「都心から近い山岳・里山アクティビティの聖地」として認識、体感できるよう取組を推進します。

No.	取組事例	区分※	主体
1	表丹沢ツーリズムの推進	◎	市、市民・活動団体、民間事業者
2	OMOTANブランド・ロゴマークの積極的な活用、拡散	◎	市、市民・活動団体、民間事業者

※区分：表丹沢魅力づくり構想前半期の評価を踏まえた取組の方針を示します。

更新(◎)・・・前半期中に一定の達成があった上で、目標を前進させて進行する取組

継続(○)・・・目標に対して、同様に進行する取組

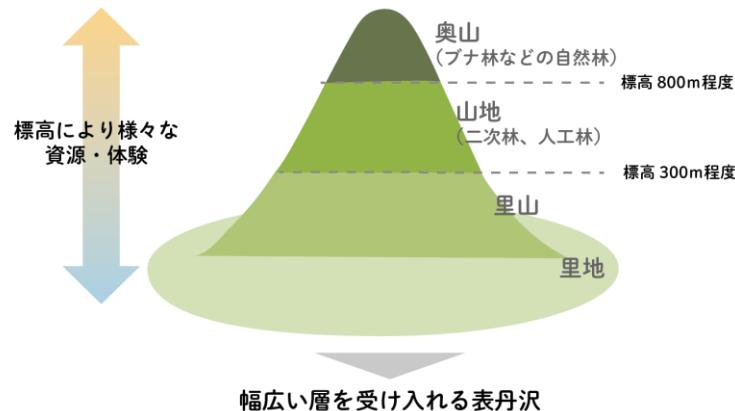
見直し(▽)・・・取り巻く環境の変化により、目標を見直して進行する取組

統合(△)・・・進捗等から他の取組と有機的に統合することで、相乗効果が見込まれる取組

新規(★)・・・新たな取組

¹² ブランディング：その地域に存在する自然、歴史・文化、観光等の地域資源の付加価値向上を図ること。

■多様な資源・体験を生む表丹沢の地形



■表丹沢ツーリズムの一例



森林セラピー



星空観察会



ワークショップ（秦野産茶葉による染物）

■OMOTANロゴマークとオリジナルグッズ



「OMOTAN」の「M」と「A」を表丹沢の山々に見立て、ブルーは名水、グリーンは豊かなみどり、ピンクは桜などの花を表現しています。



■コンセプトブック

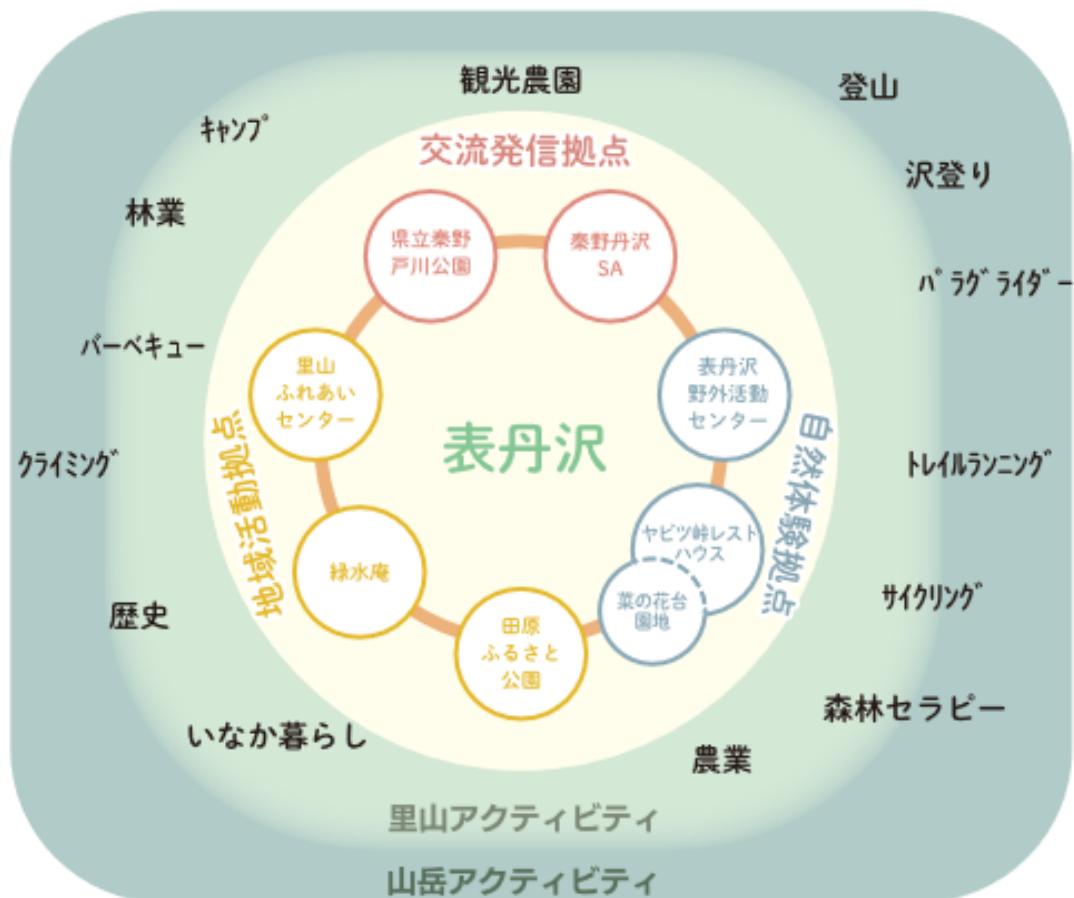


2 活動を支える拠点形成

本構想に位置付けている、「交流発信拠点」、「自然体験拠点」、「地域活動拠点」については、引き続き、特徴ある施設づくりを進めて多様な活動を支え、新たな交流や活動をもたらすための拠点とします。

拠点の更なる充実に向け、市所有施設においては、必要に応じて運営の見直しや施設の改修等を検討していきます。

■表丹沢エリアにおける各拠点と資源の関係性



交流発信拠点

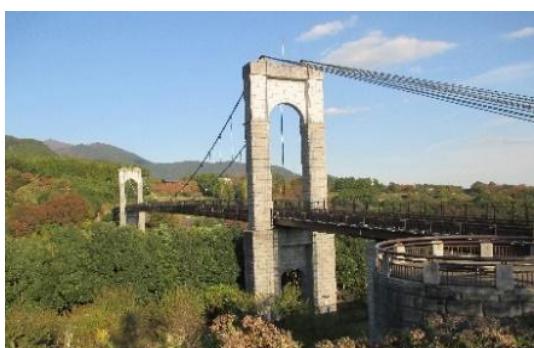
交流発信拠点では、各取組の主体による表丹沢の情報や魅力の発信により、「都心から近い山岳・里山アクティビティの聖地」としての認知度やブランディングの強化を図るとともに、来訪者が自分に合った楽しみ方を見つけられる、出会いの場となる拠点の形成を目指します。

① 県立秦野戸川公園【○】

特性	(1) 新東名高速道路の秦野丹沢SA、スマートICに近接しています。 (2) 園内を水無川が縦断し、1年を通じて四季を感じられる草木花を鑑賞できるほか、夏場は川遊びやバーベキュー利用者でにぎわいます。 (3) 西側エリアは、パークセンターや秦野ビジターセンターがあります。また、同公園の北西部に位置する大倉高原付近にはテントサイトも開設され、大倉の登山口として多くの登山者が利用しています。 (4) 東側エリアは、山岳スポーツセンターやはだの丹沢クライミングパーク等の施設があり、山岳スポーツセンターは宿泊が可能です。
方向性	(1) 県との連携によるファミリー層など表丹沢の自然を気軽に楽しむスポーツとしての魅力向上、サービス向上策の検討 (2) 新東名高速道路の秦野丹沢SA、スマートICの開設による利便性向上を捉え、表丹沢地域の活性化や自然と共存したライフスタイルの実現に寄与する公園としての更なる魅力向上の促進 (3) 沢登りなど周辺のアクティビティとクライミング施設が連携したプログラムの提案等による山岳スポーツの普及促進

② 秦野丹沢SA【○】

特性	(1) スマートICの併設により、市内への新たな人・モノの流れの創出が期待されます。 (2) ぶらっとパーク ^{※13} が整備予定であり、多くの近隣住民等の利用も想定され、新たなにぎわいの拠点として期待されます。
方向性	中日本高速道路(株)との連携による表丹沢の玄関口として、表丹沢の資源や体験等の情報発信拠点、体験への出発拠点としての機能検討



県立秦野戸川公園



秦野丹沢SAイメージ図（出典：中日本高速道路(株)）

¹³ ぶらっとパーク：近隣の住民等が一般道からSA・PAの施設を利用できるように整備したもの。

自然体験拠点

自然体験拠点では、地域固有の自然や歴史・文化等の資源の活用により、体験を支える機能を強化することで、表丹沢の魅力を体感しながら発見してもらうとともに、人それぞれの楽しみを提供できるような拠点の形成を目指します。

① 表丹沢野外活動センター【○】

特性	(1) 丹沢大山国定公園内、標高約400mの表丹沢の麓にあり、周辺には葛葉の泉や桜沢林道があり、自然に囲まれています。 (2) 施設内には、宿泊施設やキャンプ場のほか、風呂棟やいいろり棟、森林遊び場（アスレチック）等が整備されています。 (3) 民間活力の導入（令和5年4月から指定管理者制度）により、様々なイベントが行われており、市内外から多くの利用があります。
方向性	(1) 利用者目線に立った柔軟な施設利用方法の検討による利用者の増加及び満足度の向上 (2) 民間活力を導入した運営による山岳・里山アクティビティの活動を支える拠点としての活性化 (3) 周辺の林道や他の施設との連携による山岳・里山アクティビティの活性化

② ヤビツ峠レストハウス・菜の花台園地【○】

特性	(1) ヤビツ峠は、塔ノ岳や大山への登山口であるとともに、ドライブやツーリング、サイクリングの休憩スポットとしてもぎわっており、県道70号は宮ヶ瀬方面へつながっています。 (2) 菜の花台園地は、県道70号の途中にある景観スポットで、トイレやベンチ等が整備されており、ドライブやツーリング、サイクリングの休憩スポットとなっています。また、展望台もあり、市街地から相模湾までを一望でき、夜景のスポットとしても有名です。
方向性	(1) 令和2年度末に完成したヤビツ峠レストハウスは、登山やサイクリングを中心とした山岳・里山アクティビティの活動を支える機能の充実及び多様なアクティビティの拠点となることによる新たな活動の創出や展開づくり (2) 菜の花台園地は、県との連携による休憩スポットの魅力向上策として、公園のクリーン活動、剪定の実施、キッチンカーの活用等の実施



表丹沢野外活動センター



ヤビツ峠レストハウス



菜の花台園地

地域活動拠点

地域活動拠点では、地域の人材や地場産品の活用により、地域活動を活性化させ、魅力を発信し、地域と来訪者の交流を創出することで、地域への愛着や誇りの形成につなげていくとともに、魅力的なスローライフを発信できる拠点の形成を目指します。

① 田原ふるさと公園【◎】

特性	(1) 周辺には、源実朝公御首塚や波多野城址など歴史・文化遺産が多く立地しています。 (2) 東側の高台からは、田園風景と富士山の眺望が楽しめます。 (3) 施設内の「ふるさと伝承館」は、農産物直売所、そば処「東雲」、漬物加工施設があり、そば打ち体験もできます。 (4) 近隣住民だけでなく、市内外からドライブ客やサイクリスト等も多く訪れています。
方向性	(1) 近隣住民や来訪者が利用する景観を生かした休憩スポットとしての魅力向上 (2) 農業や周辺の歴史・文化遺産等との連携による地域と来訪者の交流創出 (3) 近隣住民が、交流や活動を楽しむ地域活動の拠点としての役割向上

② 緑水庵【◎】

特性	(1) 県道70号沿いの蓑毛集落にあり、蓑毛自然観察の森の入口に位置しています。 (2) 昭和初期の農家住宅で、当時の典型的な葉たばこ農家に見られる建築様式や暮らしを知る上で貴重な遺構として、国の登録有形文化財に登録されています。 (3) 令和6年度に大型バスの乗入れも可能とする駐車場と多目的広場を整備しました。地元団体が実施しているお月見や紅葉ライトアップ等のイベントには、市内外から多くの人が訪れており、多目的広場等の整備によりますます活動が活発になっていくものと考えられます。
方向性	(1) 葉たばこ栽培や蓑毛の大山道としての歴史の継承 (2) 地元小中学生等の校外学習や農業体験によるいなか暮らしの魅力発信 (3) 多目的広場を活用したイベント・ツアーの造成



田原ふるさと公園



緑水庵(紅葉ライトアップ)

③ 里山ふれあいセンター【○】

特性	(1) 表丹沢の山麓に位置しており、施設内には、研修や会議などができる研修室、充実した機材が揃った木工実習室があります。木工実習室には木工指導員も常駐していて、初心者でも指導を受けながら安心して木工体験ができます。 (2) 現在は、秦野市森林組合が指定管理者として管理運営を行っています。 (3) 年間イベントとして、木工教室、石窯を使ったピザ教室、手打ちそば教室、椎茸の植菌体験教室、林業現場の見学会等を実施しています。
方向性	(1) 里山活動団体の活動を支える拠点としての機能強化 (2) 林業体験等を通した林業に対する市民等の関心の高まりや、森林整備ボランティアの体験等による林業活性化



里山ふれあいセンター

3 回遊と滞在を高める仕掛けの充実

表丹沢エリアを訪れる方が1地点にとどまることなく、域内の林道を活用したアクティビティや観光農園などの様々な魅力に触れられるよう、回遊と滞在を促進するための各種の資源活用に向けた取組を進める中で、小田急線4駅と連携した二次交通の充実にも取り組みます。

No.	取組事例	区分	主体
1	周遊観光につながる林道の活用 (1) 市営林道：イベント等の開催の積み重ねによる有効活用方策の検討 (2) その他林道：関係機関との調整による活用可能性に向けた検討	◎	市、森林組合、神奈川県
2	観光農園の拡充と連携	○	市、JAはだの、市内農家
3	自然と調和した案内看板等の設置促進	▽	市、神奈川県、民間事業者
4	宿泊施設の可能性検討	○	市、民間事業者
5	小田急線4駅と表丹沢との周遊性を高める二次交通等の検討	★	市、民間事業者

【参考事例】

● 看板の設置ルール（ニュージーランド）



ニュージーランド自然保護省（DOC^{※14}）は、自然保護区域における安全管理のためのサインガイドを作成しています。ガイドには、リスク軽減に資する看板の色や文言、トレイル利用者の目線の高さに合わせた設置、設置する看板の素材等について書かれており、統一的かつ継続的な運用を可能にしています。

出典：DOC New Zealand,
Outdoor Safety Sign Good Practice Guide, 2025.

● 二次交通（日光グリーンスローモビリティ）



グリーンスローモビリティは、低速電動モービルの通称です。4月から11月の間で日光市西町エリアの主要拠点を運行しています。定員は21名、最高時速は19kmと、小型・低速であるために路線バスでは入りづらい小道等でも運行をしやすく、まちの風景もゆっくりと楽しめます。

出典：日光市公式観光 WEB

¹⁴ DOC：正式名称は「Department of Conservation New Zealand」ニュージーランド国立公園内の自然保護区域を管理する政府機関

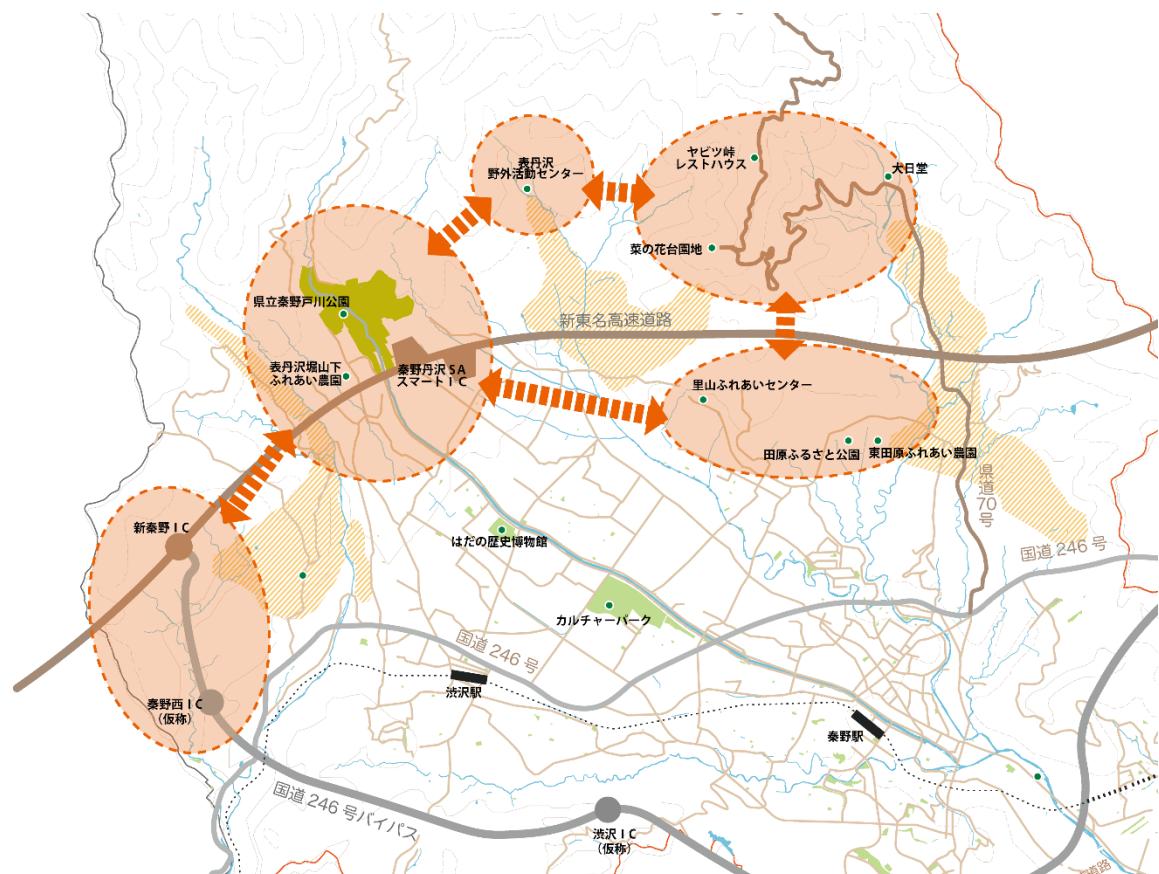
4 安全・安心に楽しむための基盤整備

県道70号や秦野丹沢SA、スマートIC周辺は、表丹沢での活動を支える重要な交通基盤です。必要に応じて道路交通網、道路整備及び交通ルール等の検討を行うことで、交通環境を快適にし、安全・安心に楽しむための基盤を整えていきます。

No.	取組事例	区分	主体
1	秦野丹沢スマートＩＣ外周道路等の整備	○	市、神奈川県
2	県との連携による県道70号の道路拡張や歩道設置等の可能性検討のほか、効果的な交通ルールと周知方法の研究	○	市、神奈川県
3	秦野丹沢スマートＩＣ周辺施設間の連携向上を図るアクセス道路の整備検討	○	市
4	ＡＩ等デジタル技術を活用した道路管理方法の研究	★	市

■新東名高速道路周辺における道路網検討の基本的な考え方

新東名高速道路の全線開通を見据え、来訪者を県立秦野戸川公園や表丹沢野外活動センターなど表丹沢の周辺施設に誘導できる道路網を検討し、今後の道路整備に必要な目標やコンセプトの形成を推進します。



注) は、表丹沢の周辺施設間のネットワークをイメージしたものです。

方針2 資源の適切な保全と新たな展開

表丹沢の最大の魅力である森林や里山等の自然資源は、本来の自然の豊かさを継承しながら、時代にあった活用をしていくことが望されます。適切な保全と地場産品等の新たな形での魅力発信を実施し、資源の更なる付加価値化を進めます。

I 資源の新たなプロモーション

表丹沢は、落花生やそば、お茶など、豊富な水（地下水）と緑に育まれた数多くの農産物に恵まれています。これらの地場産品は、先人達のたゆまぬ努力と情熱によって、「秦野ならでは」の名産物として、その姿をつないでいます。

こうした歴史をくむとともに、時代のニーズやトレンドに応じた形で一層発展させていくため、令和7年度から“丹沢の杜、名水のまち”という新たなコンセプトを掲げた地域ブランディング事業を推進しています。コンセプトが強く感じられる商品やサービスを「はだのブランド」として認証し、他地域に誇れる地場産品として、様々な機会を捉え、広くプロモーションを仕掛けていきます。

No.	取組事例	区分	主体
1	地域ブランディングの推進	▽	市、はだのブランド推進協議会、民間事業者
2	秦野名水の利活用	○	市、観光協会、民間事業者
3	地場産農産物等を活用した、農家レストランの拡充	○	市、市内農家、民間事業者
4	地場産農産物等を活用した、農家や製造・加工、流通・販売等との異業種連携による更なる6次産業活性化策の検討	○	市、JAはだの、市民・活動団体、民間事業者
5	森林の魅力に触れ、自然に親しめる取組の促進	○	市、民間事業者
6	展望ポイント・地域景観拠点 ^{※15} の指定・登録、保全及び活用	○	市、市民・活動団体、民間事業者

¹⁵ 地域景観拠点：「秦野市景観まちづくり条例」に基づき、地域の景観資源の保全及び活用を目的に、地域の景観まちづくりの拠点となり、景観の視点から特に重要な価値があると認められる景観資源のうち、規則で定める要件を満たすもの。

■はだのブランド “丹沢の杜、名水のまち”

<はだのブランドとは>

秦野市の地域イメージの向上による交流人口の拡大と、地域経済の活性化に寄与する、「丹沢の杜、名水のまち」で育まれたことが強く感じられ、かつ全国からも求められる秀逸な商品、サービスのこと。
令和7年度末時点では、6商品が認証されています。



全国で唯一「秦」の名を冠する秦野市。その希少な地名を堂々と掲げ、漢字の凛とした佇まいを平仮名の「の」で包み込む形は、扉を開いた「秦の印」、地域のアイコンとして親しみやすく、力強い印象を与えています。



■秦野名水



秦野市域に存在する地下水を水源とする水を「秦野名水」と呼称を統一し、秦野名水を使用した商品のラベル等にロゴマークを表示することで普及啓発を図っています。

2 遊休地等の有効利用

表丹沢には、活用可能な遊休地が複数存在しており、本構想をもって、これらの適切、かつ有効な土地利用を進めることとしていました。その結果、大倉高原テントサイトについては、前半期での整備が進み、利用を開始しました。

構想の後半に当たる期間においても、引き続き、遊休ゴルフ場の活用などを通じて、更なる魅力向上を図ります。また、県と連携し、県立秦野戸川公園未整備区域の活用や周辺道路網の整備に取り組むことで、**新東名高速道路の秦野丹沢スマートＩＣからの更なる流入人口の誘導**を図ります。



整備された大倉高原テントサイト

No.	取組事例	区分	主体
1	大倉高原テントサイトの活用促進	◎	市
2	県との連携による県立秦野戸川公園未整備区域の活用検討	○	市、神奈川県
3	羽根森林資源活用拠点（仮称）の整備	◎	市
4	遊休ゴルフ場の活用策の検討	○	市、民間事業者

3 二次林の活用等による適切な自然保護の推進

里地里山の中核を成す二次林の間伐や雑木林等の整備を進め、定期的なイベント等を開催することにより、シカやイノシシ等の被害拡大を防ぐとともに、適切な自然保護と活用を実現していきます。

また、継続的な自然保護・活用を進めるための体制構築についても、活動団体の現状を踏まえた上で取り組みます。

No.	取組事例	区分	主体
1	雑木林等での定期的なイベント開催の促進*	◇	市、森林組合、観光協会、市民・活動団体
2	二次林の継続的整備に向けた体制の構築	▽	市、森林組合、市民・活動団体
3	里山林整備に伴う間伐材を活用した木質バイオマス導入の検討	○	市、森林組合、市民・活動団体

* 「雑木林等を活用したハイキングコース等の検討」と統合

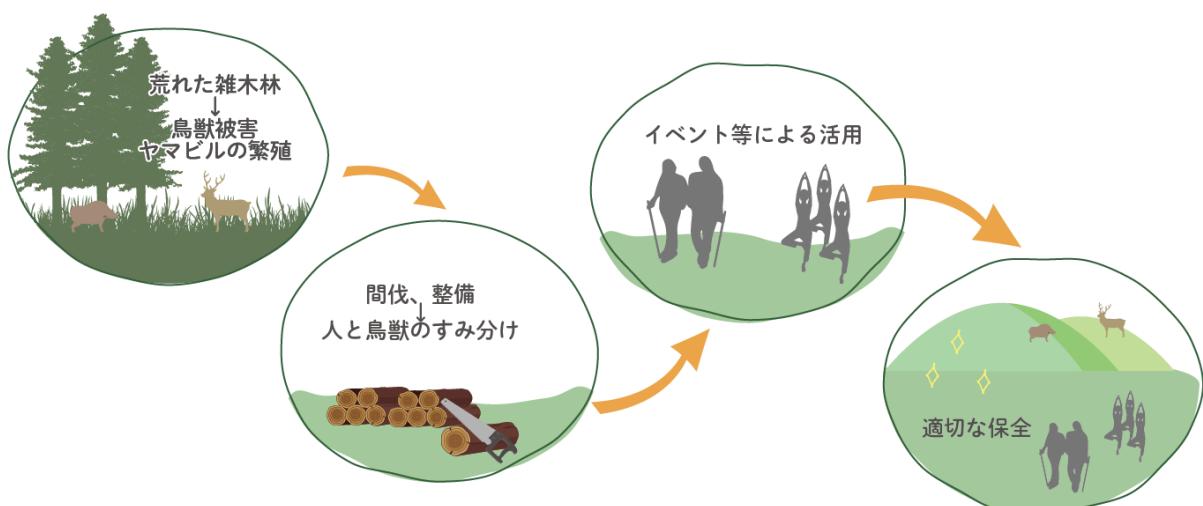


ボランティアによる下草刈り



保全された里山林

■二次林の適切な保全サイクル



方針3 地域が主体となった体験の提供

資源の磨き上げだけでなく、そこでの体験を提供することで、当地を訪れた一人ひとりが本物の魅力を見つけ出していくことが重要です。その地域でしか味わえない体験と人の出会いの創出により、「また訪れたくなる表丹沢」を目指します。

1 地域特性を生かしたコンテンツの強化

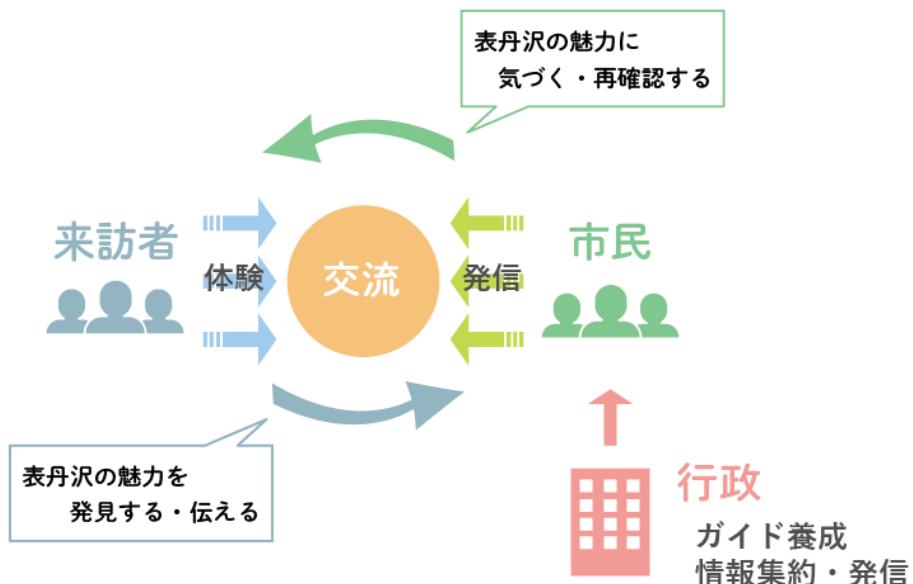
表丹沢は、地域により歴史や地勢など固有の特性を持っており、活動もそれぞれで特性が異なります。地域ごとにカラーの異なるコンテンツづくりを強化し、ここでしか味わえない体験を提供していきます。

2 地域による魅力の発信と交流

本構想を策定して以降、民間団体によって多くの体験やイベントが行われており、これらを通じて多くの方が表丹沢の魅力を知り、繰り返し訪れる契機となっています。

そのため、これらの活動がより一層円滑に行えるように、行政として地域資源の利用に係るルール整備やPR・広報の支援に注力し、構想の前半期において構築した「交流によるシナジーのサイクル」が継続的な魅力づくりにつながっていくよう取り組みます。

■交流によるシナジーのサイクル



No.	取組事例	区分	主体
1	市民や活動団体との連携による体験型コンテンツの推進*	◇	市、観光協会、市民・活動団体
2	各拠点における表丹沢やアウトドアに精通したスタッフによる魅力発信	○	市、神奈川県、民間事業者、市民・活動団体
3	夏休み等を利用したこども向け自然学校（サマースクール等）の推進	○	市、市民・活動団体
4	市街化調整区域における観光資源に資する建築などのルール整備の検討**	◇	市
5	地域資源の磨き上げに向けたルール整備の推進	★	市、民間事業者、市民・活動団体

*「時間帯や季節に応じたイベントやサービスの検討」と統合 / **「表丹沢の資源を活用した教育関連施設の検討」と統合

【参考事例】

● サイクルオアシス（広島県、愛媛県）



しまなみ海道を走る自転車旅行者が、自転車旅行ならではの回遊や交流を十分に楽しめるよう、地域の事業者が主体的に応募し、取り組む仕組です。サイクルオアシス認定事業者は、休憩やトイレ、給水、空気入れ、地域の情報提供を最低限行うこととしており、共通のタペストリーを掲げます。

出典：しまなみサイクルオアシスホームページ

● 高尾マナーズ（東京都・八王子市）



年間260万という世界一の登山者総数の高尾山には多くの人が訪れる中、経験の浅いトレイルランナーや、トレイルランナー以外のランナーも増えてきたことを受けて、高尾とトレイルランニングを愛する有志が「高尾トレイルマナー向上委員会」（通称：高尾マナーズ）を立ち上げ、マナーの普及啓発活動に取り組んでいます。

出典：高尾マナーズホームページ

方針4 新しいライフスタイルの定着

表丹沢は、本市最大の地域資源であり、来訪者だけでなく市民にとっても豊かな暮らしにつながるものとしていくことが期待されます。暮らし方や働き方が多様に変化していく中で、豊かな暮らしを実現する環境や資源を持つ表丹沢に市民が触れ、地域の魅力を再発見することで、地域への誇りや愛着を創出していくことが重要です。

なお、本方針は、策定当初の社会情勢であった“コロナ禍”を踏まえ、「新しいライフスタイルの提案」としていましたが、デジタルの急速な普及・定着や、国が掲げている二地域居住施策の推進など、新たなフェーズに移行したことから「新しいライフスタイルの定着」として取組を進めます。

I 市民の暮らしに身近な表丹沢

市外在住者に向けた観光視点のコンテンツの提供のみならず、市内で生活する人も対象とした表丹沢での体験を推進することで、表丹沢と市民がより近いものとなります。

本構想の策定を契機に、表丹沢の資源に誇りと魅力を感じ、その魅力を広める担い手となるOMOTANガイドの養成、さらには、ハイキングやヨガ、歴史散策など同ガイドによるコンテンツの提供が開始されました。今後も、市民の誰もが表丹沢の魅力に触れられるような取組を進めます。

No.	取組事例	区分	主体
1	OMOTANガイドの養成と積極的な活用	◎	市、観光協会、市民・活動団体
2	農福連携（農家と福祉施設のマッチング等）	○	市、神奈川県、JAはだの、市内農家、民間事業者
3	ライフスタイルを支えるテレワークの推進	▽	市、民間事業者
4	地元中学生向けの校外学習による山岳・里山アクティビティ活動の推進	○	市、市民・活動団体、民間事業者

■OMOTANガイドによるイベント



里山系ガイドによるヨガ



山岳系ガイドによるトレッキング

表丹沢の「歴史・文化」や「自然」の基礎知識、「ガイドとしての心得」、「コミュニケーション」、心と体の状態に関わる「ウェルビーイング」、「SDGs」を中心とした講座を受講し、認定試験をクリアした11名（里山系4名／山岳系7名）を認定しました。

【参考事例】

● 農福連携事業（佐賀県佐賀市富士町）



佐賀市が、NPO法人佐賀中部障がいふくしネットと共同により取り組んでいます。域内での出荷にかかる調整作業だけでなく、みかん農家宅での作業や、アスパラガスの引き取り作業など、作業場所も徐々に広がっています。

また、啓発用のDVDなども制作し、研修会等での使用を通じて事業に対する理解の促進に努めています。

出典：佐賀市公式ホームページ

● 富士見 森のオフィス（長野県富士見町）



中央自動車道諏訪南インターチェンジから約10分の位置に所在する、ワークスペースを完備した施設です。キャンプ場や宿泊部屋も併設しており、さまざまなスタイルで利用することができます。保育園の受入プログラムと連携した平日親子ワーケーションも実施しています。

出典：富士見 森のオフィス公式ホームページ

2 表丹沢での新たな楽しみ・暮らしの提案

新東名高速道路の全線開通により、今後、更に多くの来訪が期待されます。都心からのアクセスが良く、本格的な自然が味わえる立地を生かしながら、表丹沢を訪れた人が、自分に合った新たな楽しみの発見や魅力あるいは暮らしに関心を持つきっかけとなるよう、気軽に表丹沢の魅力を体感できる機会を提供していきます。

No.	取組事例	区分	主体
1	いなか暮らし体験と併せた移住や二地域居住、週末の居場所づくりに関する情報提供	◎	市、市民・活動団体
2	さと地共生住宅制度 ^{※16} の活用による住環境の提供	◎	市、民間事業者

■さと地共生住宅制度と移住体験（ともに上地区）



平成25年に上地区の既存集落のコミュニティ維持のために創設された開発許可制度。市街化調整区域でありながら、里地里山など魅力ある地域資源を生かした住宅の立地を受け入れている。



移住の検討や、田舎暮らしを体験したい市外在住者向けに「いなか暮らし体験ツアー」を開催している。森での体験や畠での収穫作業のほか、移住支援施設等も見学できることから、人気を集めている。

¹⁶ さと地共生住宅制度：正式名称は「さと地共生住宅開発許可制度」。

方針5 交流・発信による魅力の高め合い

表丹沢では、多くの団体等によって様々な活動が行われていますが、これまでの個々での情報発信にとどまっていた情報を集約し、より効果的なターゲットに応じた情報を発信するとともに、周辺団体や市町村とも連携することで、地域に隔たりのない魅力づくりを実施していきます。

I 情報プラットフォームの充実

表丹沢総合ホームページ「OMOTAN」及びOMOTAN公式Instagramを、表丹沢にある多くの資源や活動を集約した情報のプラットフォームとして、インバウンド向けやそれぞれの嗜好に応じた情報を提供し、来訪のきっかけを促すとともに、既に訪れた人にも新たな発見を感じ取ってもらえるような再訪のきっかけとしていきます。

No.	取組事例	区分	主体
1	総合ホームページの更なる充実	◎	市
2	SNS ^{※17} 等による戦略的な情報発信*	◇	市、観光協会

* 「ターゲットやテーマによって異なる情報発信」と統合

■表丹沢総合ホームページ「OMOTAN」



令和4年8月公開

年間約20万PVを記録（令和6年度）

■OMOTAN公式Instagram



令和4年7月開設

フォロワー数は1万人を突破

（令和7年12月末日時点）

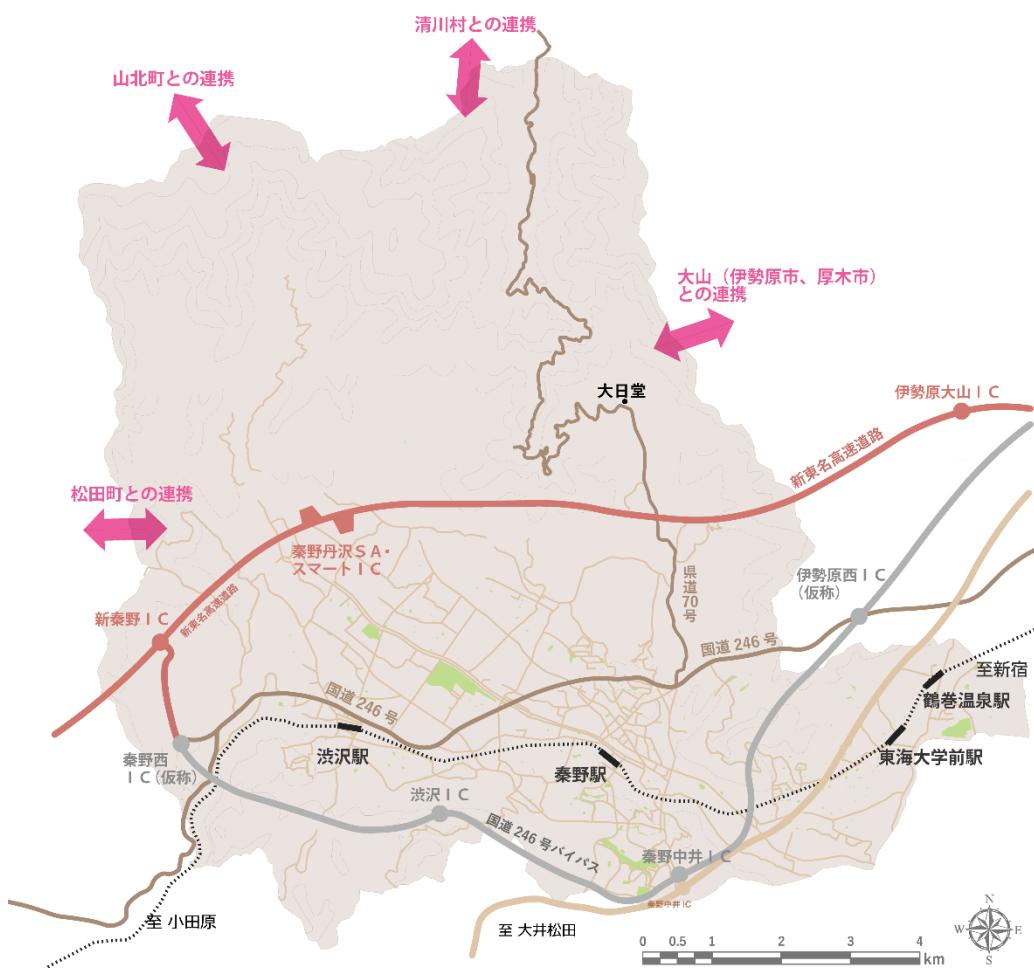
¹⁷ SNS : Social Networking Service の略。インターネット上で社会的なネットワーク（つながり）を提供するサービス

2 周辺地域との連携による魅力の広がり

表丹沢周辺には、本市域に限らず、周辺市町村に社寺や山岳スポット等の多くの資源が点在しています。そのため、周辺市町村及び関係団体等と連携し、このような資源を公共交通機関や多様な移動手段を活用して回遊できるように、移動の快適性を向上させることで、広域的エリアからの来訪者の増加と広域観光地域としての魅力発信につなげていきます。

No.	取組事例	区分	主体
I	県や周辺市町村との広域的な連携と情報発信の強化 「新たな観光の核づくり事業（大山地域）の推進」と統合	◇	市、神奈川県、周辺市町村

■周辺市町村との連携

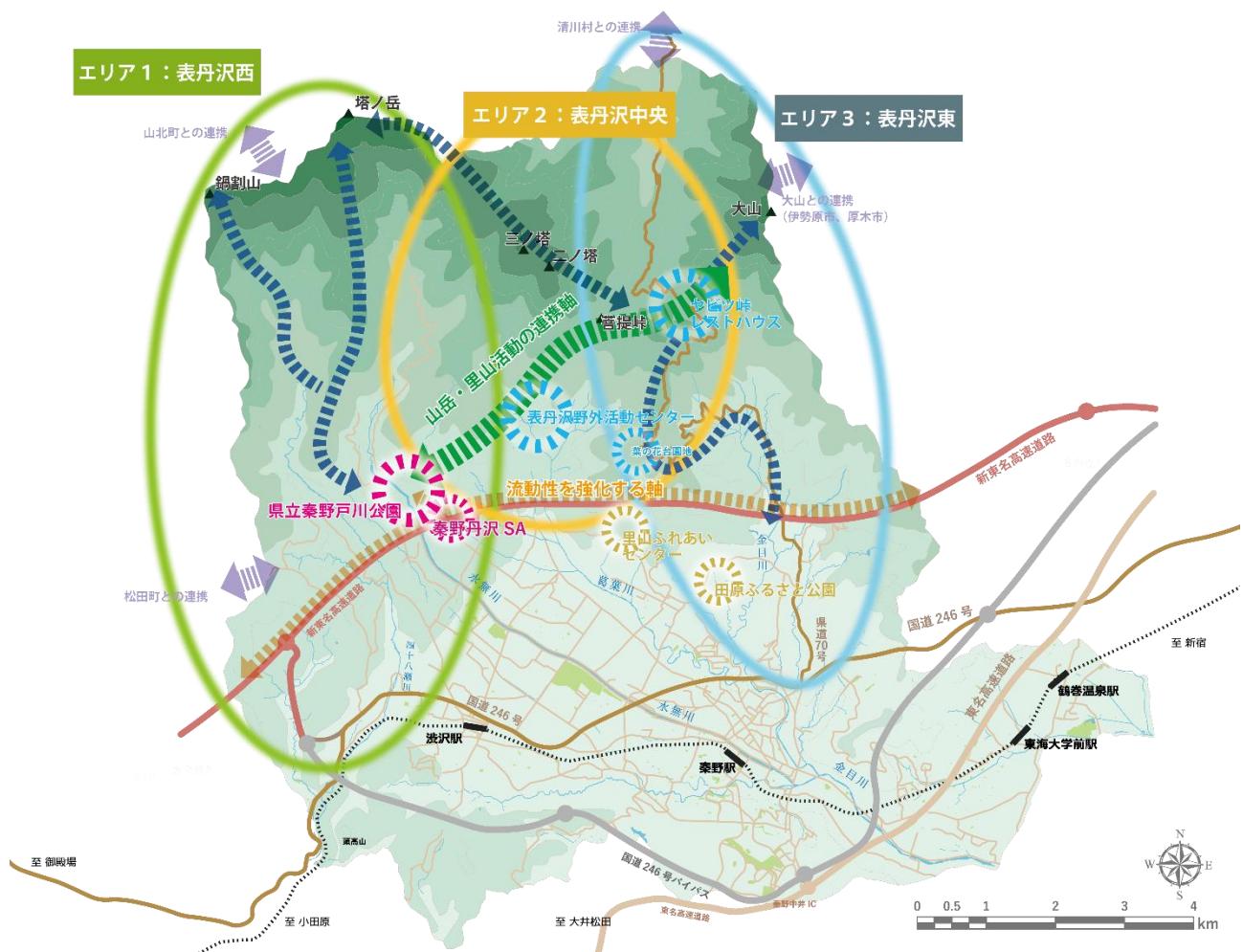


4 エリア別方向性

先の「5つの基本方針」を踏まえ、それぞれのエリアが持つ資源を生かしながら、特性の異なる活動を創出していくため、表丹沢を3つのエリアに分け、各エリアの方向性を具体的な場所や主体とともに整理します。

また、エリア間の連携強化のため、各エリアに点在する拠点を中心に3つの軸でつなげます。

■ 3つのエリアと3つの軸



I 3つのエリア

表丹沢を3つのエリアに分け、各エリアの特性と方向性を整理します。

エリアI 表丹沢西：楽しみが始まる出会いのエリア

【特性】

表丹沢西は、丹沢山地に囲まれた自然を生かしたバーベキュー・川遊び、本格的なクライミングが楽しめるとともに、1年を通して多くの登山者やハイカーでぎわう表丹沢登山の玄関口でもある県立秦野戸川公園のほか、秦野名産の落花生やいちご等の観光農園・体験農園、地元関係者によるいなか暮らし体験ツアーなど、豊かな自然を感じることができるエリアです。

また、新東名高速道路の秦野丹沢スマートIC及び新秦野ICの開通、さらに、令和10年度以降には、全線の開通や秦野丹沢SAの供用が予定されているなど、首都圏や中部・関西方面からの交通利便性が飛躍的に向上することから、本市の新たな玄関口としても期待されます。

【方向性】

表丹沢西は、「楽しみが始まる出会いのエリア」として、秦野丹沢SAやスマートIC、県立秦野戸川公園等の施設を中心に、表丹沢の新たな玄関口としての機能が期待されています。

そこで、資源や体験の発信、各エリアの回遊性の向上につながる基盤を整えることで表丹沢の玄関口としての機能を充実していくとともに、様々な山岳・里山アクティビティを気軽に体験できるコンテンツの充実により、自分にあった楽しみ・暮らしの発見を創出していくきます。

また、隣接する松田町・山北町と連携し、広域的な魅力向上を図っていきます。



川遊び（県立秦野戸川公園）



観光農園



上地区いなか暮らし体験



バーベキュー（県立秦野戸川公園）



クライミング（はだの丹沢クライミングパーク）

エリア2

表丹沢中央：体験による自分発見のエリア

【特性】

表丹沢中央は、登山や沢登り、トレイルランニング、サイクリング、森林セラピー等の様々な山岳・里山アクティビティが盛んなエリアです。

また、キャンプ場、風呂棟などを有する表丹沢野外活動センターなど、親子で木の温もりを感じ、創る楽しさが味わえる木工体験、石窯を利用したピザ焼き体験などができる里山ふれあいセンターなど、山岳・里山アクティビティの活動拠点となる市所有施設が点在しています。

さらに、表丹沢に張り巡らされた林道や相模湾を一望する菩提峰等があり、これらの活用を図ることで、各エリア・施設等の連携強化や回遊性の向上が期待されます。

【方向性】

表丹沢中央は、「体験による自分発見のエリア」として、実際の体験を通じ、一人ひとりが表丹沢との関係を築き、新たな楽しみを作り出していくことが期待されています。

そこで、様々な山岳・里山アクティビティの中心地として、体験を提供するための環境を整えることで、人それぞれの表丹沢とのコトづくり^{※18}につなげていきます。

また、これらの取組を共有し、交流できる機会を増やしていくことにより、今ある活動だけにとどまらない、新たな活動の展開を支える拠点形成を図っていきます。



表丹沢野外活動センター



木工体験（里山ふれあいセンター）



菩提峰



登山（表尾根旧書策小屋付近）



沢登り（水無川水系 セドノ沢）

¹⁸ コトづくり：製品を単に利用することで生まれる価値（機能）だけでなく、付加価値を与えることや価値を生み出す仕組み・プロセスをつくりあげること。

【特性】

表丹沢東は、かつて大山詣りへの人々を案内する御師の里として栄えた蓑毛の御師集落や鎌倉幕府3代将軍の源実朝公御首塚など多くの歴史的な文化遺産が点在しています。

また、市街地から清川村方面へと縦断する県道70号沿いにあるヤビツ峠は、塔ノ岳や三ノ塔、大山等の登山口であるとともに、ヒルクライムの聖地となっており、途中にある菜の花台園地は、市街地から相模湾まで一望できる景観スポットとしても有名です。

このことからも、ヤビツ峠レストハウスは、登山やサイクリングなどの「山岳・里山アクティビティ」の重要な拠点として、より一層機能の発揮が求められます。

このほか、春嶽湧水・護摩屋敷の水等の湧水や山間の風景に溶け込むように広がる棚田等の豊かな自然も、本エリアを楽しむ魅力の一つです。

【方向性】

表丹沢東は、「地域活動が生む交流のエリア」として、活動団体を中心となり、地域の特性によって異なる体験を通じ、市民や来訪者等の交流が期待されています。

そこで、主体ごとに特性の異なる活動を充実させるとともに、それらの活動を支える基盤を整えることで、活発な市域活動と交流の促進につなげていきます。

また、隣接する伊勢原市、厚木市（大山エリア）や清川村と連携し、広域的な魅力向上を図っていきます。



ヤビツ峠



菜の花台園地



春嶽湧水



菜の花台からの市街地・相模湾



棚田（名古木）

2 3つの軸

特色の異なる3つのエリアの連携を強化するため、次の3つの軸を設定し、それぞれの軸の役割を整理します。

山岳・里山活動の連携軸

現状、表丹沢のルートは既設道路や登山道などの縦断路が基本となっており、「里山」と呼ばれるエリアの横のつながりが薄いことが課題となっています。

各エリアで重要な拠点となっている県立秦野戸川公園、表丹沢野外活動センター、ヤビツ峠レストハウスの3拠点をつなぎ、山岳・里山活動の連携を生み出す軸として位置付けます。これにより、林道活用の検討や拠点同士の連携を図ることで、里山エリアを横断した活動を可能とし、表丹沢一帯で山岳・里山アクティビティを楽しめる環境の創出につなげていきます。

流動性を強化する軸

令和10年度以降に予定される新東名高速道路の全線開通により、広域からの新たな人・モノの流入が期待されています。

新東名高速道路周辺を、3つのエリア間の流動性を高める軸として位置付けます。新東名高速道路の全線開通に合わせた周辺の交通環境の一体的な整備により、周辺施設への流動性の強化を図ります。

山岳回遊軸

表丹沢は、ヤビツ峠から塔ノ岳へ続く通称「表尾根縦走コース」をはじめ、数々の登山道や本格的なサイクリングルートがあり、多くの登山客やサイクリスト等が訪れます。

拠点施設を起終点とする登山道やサイクリングルートなどを、山岳ルートの回遊性を高める軸として位置付けます。加えて、拠点施設での情報発信や案内看板の設置等により、「訪れるたびに新たな発見がある表丹沢」をPRすることで、再訪を促し、表丹沢一帯の回遊性を高めます。

エリアⅠ：表丹沢西 楽しみが始まる出会いのエリア



<エリア別方向性><拠点>

- | | |
|-------|--------|
| 方向性 1 | 交流発信拠点 |
| 方向性 2 | 自然体験拠点 |
| 方向性 3 | 地域活動拠点 |

<輪>

- | |
|----------------|
| ➡➡ 山岳・里山活動の連携輪 |
| ➡➡ 流動性を強化する輪 |
| ➡➡ 山岳回遊輪 |

対象エリア

丹沢大山国定公園

里山系団体活動フィールド

森林セラピーロード

主な登山道

観光農園・市民農園

方向性1 表丹沢の玄関口としての機能

(1) 魅力発見のきっかけとなるプラットフォームづくり

市外から多くの人が訪れるエリアとして、交流発信拠点を構築するとともに、市民や活動団体等と連携し、表丹沢の様々なアクティビティの紹介やこれらに精通したスタッフを配置することで、来訪者が地域のプレイヤーと直接交流・相談しながら、それぞれに合った過ごし方を見つけられる環境づくりを関係機関と検討していきます。

また、各施設と連携を図りながら、それぞれの体験の予約状況をリアルタイムで発信できるような仕組みを整え、季節や時間帯に応じた体験の提供など、総合的な情報発信をすることでエリア全体での魅力向上に努めています。

(2) 表丹沢全体へ人の流れをつくり出す仕組み

このエリアから、表丹沢全体への回遊性を高めていくため、秦野丹沢SAやスマートIC周辺の道路基盤整備を推進し、安全・安心で快適な道路網の形成に取り組みます。

また、民間事業者等と連携を図りながら、秦野丹沢SAやスマートIC周辺における宿泊施設立地の可能性等の検討を行い、表丹沢全体へと人の流れをつくり出します。

方向性2 自分にあった楽しみ・暮らしの発見

(1) 気軽にできる体験メニューの提供

周辺環境との調和に配慮したふさわしい土地利用のもと、地元農家等と連携を図りながら、観光農園の拡充や効果的な情報発信を行い、利用しやすい環境を整えていきます。

また、県立秦野戸川公園など多くの人が来訪する拠点を起点にした初心者向けのハイキングコースの整備・周知により、はじめて訪れた人でも気軽に、表丹沢の山岳・里山アクティビティを体験できる機会を提供することで、それぞれにあった楽しみを発見し、また訪れたくなるきっかけにつなげていきます。

(2) 地域と連携した「いなか暮らし」の魅力発信

上地区では、市民や活動団体等と連携し、市民農園等を活用した週末農業やいなか暮らし体験などを活用しながら、「さと地共生住宅制度」を周知していくことで、表丹沢の豊かな自然を生かしたスローライフが満喫できる住空間の創出につなげていきます。

方向性3 広域的な魅力向上

松田町・山北町との連携

松田町や山北町とは、観光等の情報発信を相互に行うとともに、観光資源や登山道、広域ハイキングルート等の活用について、連携を図ることで、広域的な魅力向上につなげていきます。

エリア2：表丹沢中央 体験による自分発見のエリア



<エリア別方向性><拠点>



<軸>

- | | |
|----------|----------------|
| ○ 交流発信拠点 | ◀▶ 山岳・里山活動の連携軸 |
| ○ 自然体験拠点 | ◀▶ 流動性を強化する軸 |
| ○ 地域活動拠点 | ◀▶ 山岳回遊軸 |

対象エリア

丹沢大山国定公園

里山系団体活動フィールド

..... 森林セラピーロード

- - - 主な登山道

■ 観光農園・市民農園

方向性1 人それぞれの表丹沢とのコトづくり

(1) 資源を生かした体験の充実

市営林道である桜沢林道や羽根林道、組合林道である菩提林道では、秦野市森林組合等と連携し、新たなサイクリングやハイキングイベントでの活用を検討するとともに、遊休地等では、民間事業者と連携を図りながら、マウンテンバイクやパラグライダー等の多様な活動フィールドを創出することで、山岳・里山アクティビティの更なる魅力向上につなげていきます。

また、森の中で五感を使いながら散策することで、心身を癒すことができる森林セラピーロードや、比較的容易に周遊できるヤビツ峠～菩提峠間のハイキングコース等を効果的に情報発信することにより、表丹沢来訪のきっかけにつなげることで、エリア全体の回遊性を高めていきます。

(2) 多様な関わり方の創出

表丹沢の麓には、複数の福祉施設等が立地しており、これらの施設や周辺農家等が協力しながら、農業体験を通じ、自信や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業において、新たな働き手の確保にもつなげていくことで、今まで以上に表丹沢に触れ合う機会を創出し、市民一人ひとりの地域への誇りや愛着を醸成していきます。

方向性2 新たな活動の展開を支える拠点形成

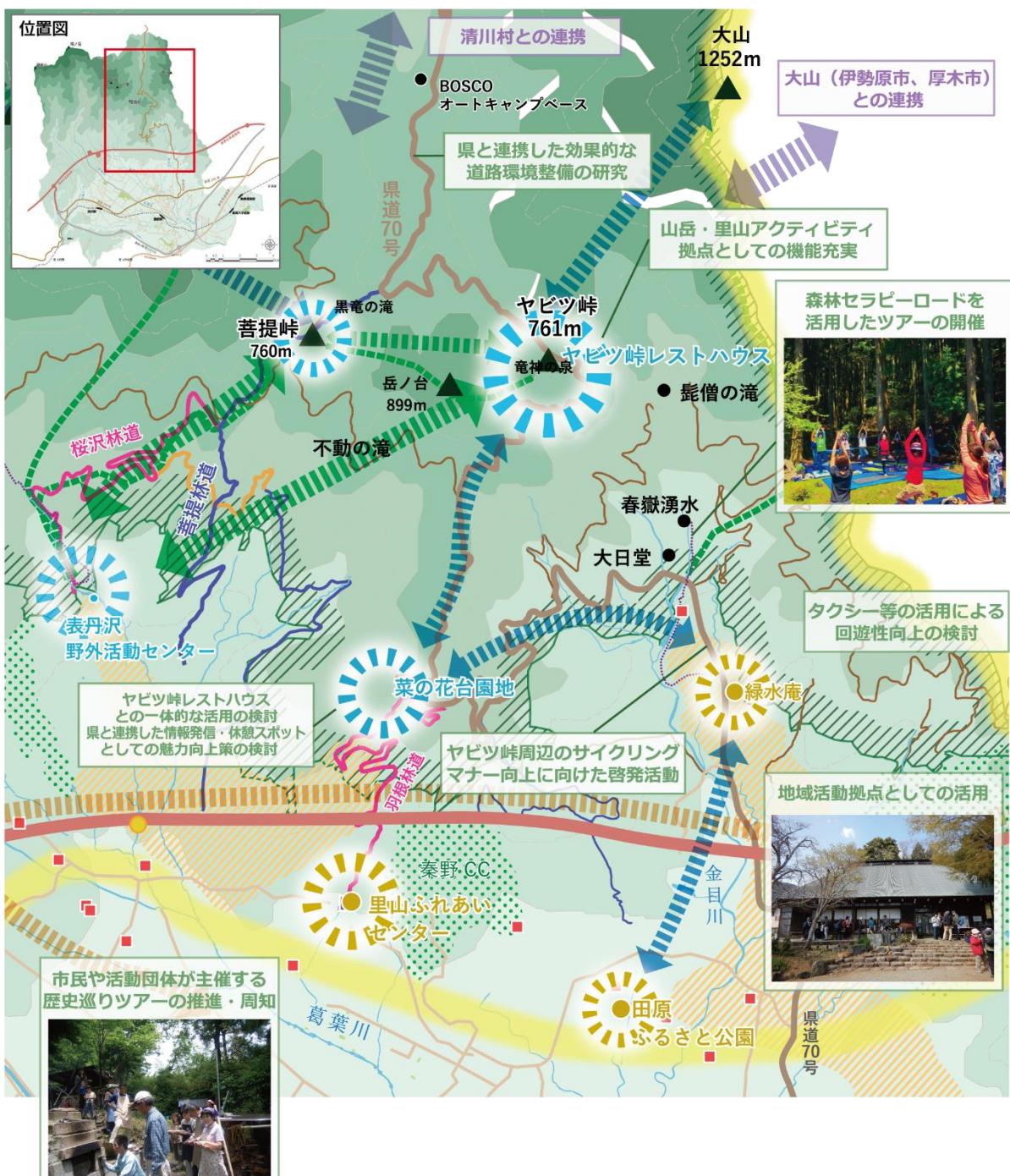
自然体験拠点である表丹沢野外活動センターでは、様々な山岳・里山アクティビティを支える活動拠点として、指定管理者による民間活力のノウハウを最大限に活用しながら、魅力ある施設の有効利用を図っていきます。

また、地域活動拠点である里山ふれあいセンターでは、林業活性化につながる活動拠点として、森林整備ボランティアなど様々な体験ができる場所としての機能充実を図っていきます。

さらに、羽根森林資源活用拠点（仮称）では、森林資源の活用など表丹沢の魅力向上につながる有効利用策を検討していきます。

これらの各拠点の魅力向上を図ることで、それぞれで活動する人々の交流につなげ、今ある活動にとどまらず、常に新しい活動が生まれる環境づくりを進めていきます。

エリア3：表丹沢東 地域活動が生む交流のエリア



<エリア別方向性><拠点>

方向性1



自然体験拠点

地域活動拠点

<軸>

山岳・里山活動の連携軸

流動性を強化する軸

山岳回遊軸

対象エリア

丹沢大山国定公園

里山系団体活動フィールド

森林セラピーロード

主な登山道

観光農園・市民農園

方向性1 活発な地域活動と交流の促進

(1) 活動を支える基盤づくり

地域活動拠点である田原ふるさと公園では、地域が主体となった持続的な運営を実現していくため、地域住民とともに魅力向上に向けた施設再整備のあり方について検討を進めています。

また、県や警察と連携を図りながら、県道70号の効果的な道路環境の整備について研究するとともに、各拠点を中心にサイクリングマナーや安全登山に向けた啓発活動をすることで、誰もが安全・安心で快適に活動できる環境づくりにつなげていきます。

(2) 地域の特性によって異なる体験

自然体験拠点であるヤビツ峠レストハウスでは、活動団体と連携を図りながら、ニーズに応じた様々な体験の提供やアウトドアスポーツグッズのレンタル等を行うなど、山岳・里山アクティビティの活動拠点として機能充実を図っていきます。

また、菜の花台園地では、県と連携しながら施設の適切な維持管理を図るとともに、民間活力を生かした取組を進め、安全で快適な休憩スポットとしての魅力向上を推進していきます。

さらに、ゆっくりと森を楽しむことができる森林セラピーロードのほか、源実朝公御首塚や大日堂、緑水庵等の歴史・文化遺産など、地域固有の資源を活用した市民や活動団体による体験を提供するとともに、各拠点での効果的な情報発信を支援していきます。

方向性2 広域的な魅力向上

(1) 大山（伊勢原市、厚木市）との連携

伊勢原市、厚木市とは、観光等の情報発信を相互に行うとともに、歴史的・地理的につながりが深い大山との連携を図り、回遊性を高めます。

(2) 清川村との連携

清川村とは、観光等の情報発信を相互に行い、県道70号でつながる宮ヶ瀬エリア等との回遊性を高めます。

(3) 県央やまなみエリア（厚木市、伊勢原市、愛川町、清川村）の連携

神奈川県から「かながわ観光連携エリア」に選定された、同エリアと新たな価値づくり、情報発信に連携して取り組みます。

第5章 構想の推進に向けて

I 推進体制

(1) 各主体間の連携

魅力づくりビジョンを共有し、実現に向けた具体的な事業を確実に推進していくためには、市民・活動団体、民間事業者、行政等がお互いの役割を理解し、各主体が連携・協働して一体的に取り組む推進体制の構築が必要です。



(2) 各主体の役割分担

表丹沢の魅力や価値を一層高めていくため、市民・活動団体、民間事業者、行政等の役割を明確にした上で、各主体の役割に応じた連携・協働の取組が重要となります。

ア 行政等の役割

本市は、本構想の推進役として、各主体が連携し情報共有できるプラットフォームである表丹沢ツーリズム連絡会議の運営を支援するとともに、担い手となる市民・活動団体の人材育成を進めています。

また、国や県、周辺市町村、観光協会等の関係機関との連携を図りながら、表丹沢の魅力向上に係る制度の見直しや事業推進のための支援策を検討することで、市民・活動団体や民間事業者の活動をサポートしていきます。

なお、市所有施設については、民間活力を導入しながら、利用者のニーズに即した運営を実現していくため、効率的で効果的な運営方法を検討していきます。

さらに、魅力づくりビジョン実現に向けた具体的な事業を円滑に進めるため、府内横断的に連携を図りながら、本構想の進捗管理や各種調整、情報発信等の取組を推進します。

イ 市民・活動団体の役割

市民・活動団体は、民間事業者や行政等と連携しながら、表丹沢での活動に積極的・主体的に参加し、触れる機会を増やすことで地域にある魅力の再発見につなげ、地域への誇りや愛着を醸成していきます。

また、体験した魅力を口コミやSNSなどあらゆる方法で市内外に発信することで、表丹沢にある様々な分野の資源を磨きながら、次世代へとつなげていきます。

なお、活動の推進に当たっては、市民・活動団体のサポート役として、近隣大学や表丹沢で活動する大学・専門学校等と連携を図ることで、専門的かつ持続的な実施体制の構築が期待されます。

ウ 民間事業者の役割

民間事業者は、市民・活動団体や行政と連携しながら、積極的に資源を磨き、つなげ、来訪者が様々な体験を通して触れられる機会を提供していきます。

また、施設等の整備に当たっては、若者や高齢者、障害者など幅広い地域雇用を創出していくとともに、自然や景観など、表丹沢が持つ資源を適切に保全していくため、デザイン等にも配慮することで、魅力的な空間を創出していきます。

2 推進プロセス

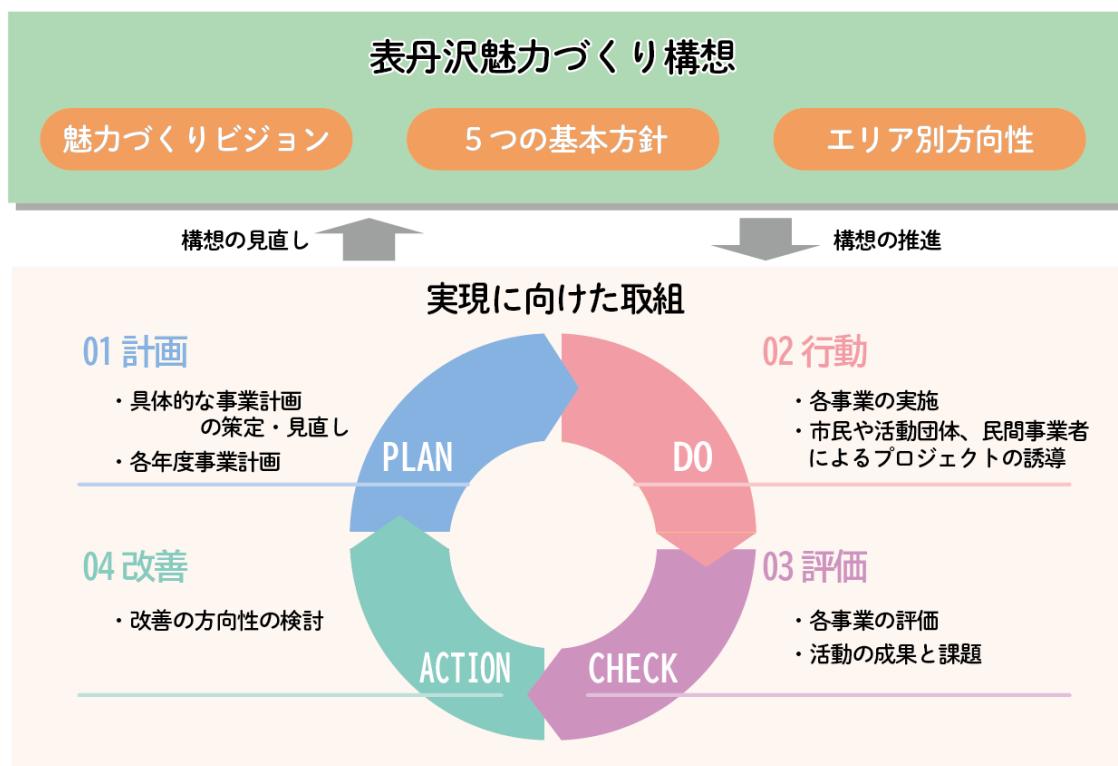
本構想の推進に当たっては、引き続き、魅力づくりビジョンの実現に向け、具体的な事業計画の策定や見直しを行いながら、魅力づくり方針に沿って進めていきます。

また、年度ごとに各事業の振り返りを行うことで、活動の成果と課題を明確にするとともに、達成できなかった取組については、その原因や問題点を分析し、その後の事業計画に反映していきます。

近年、レジャー・旅行を取り巻く環境や森林活用の環境は、世界的な旅行客の増加、デジタルの普及・定着・発展、国内の人口減少、気候変動等も含め、大きく変動しています。

本構想の後半にあたる期間においても、その環境は変化していくものと考えられるため、構想の内容に変更が必要となった場合には、適切な対策を講じることとします。

■推進プロセス





秦野市
Hadano City

「本物の魅力」が見つかる表丹沢